增補
改正 傷寒論時記藥考 四

中村俊定文庫
文庫 18
886
4

增補俚語歲時記拔萃

江戸 曲亭主人纂輯
蘐亭肯藁增補

冬

漢書律曆志 太陰者北方、北伏也陽氣伏於下、於時為冬、冬、終也、物終藏乃可稱也 帝○魏相曰北方之神、玄冥云云顓頊、黑精之君、玄冥水官之臣、少皞氏之子、曰脩曰熙、相代為水官 顓頊 顓頊乘坎執權司冬 玄冥 神應鍾 律 月令廣義 鍾者動也、言萬物應陽而動下藏也

月令 冬月其帝顓頊、其神玄冥、其蟲介、其音羽、律中應鍾、其數六、其味鹹、其臭朽、其祀行、祭先腎、其祭井、祀先祖、其牲彘、其穀豆、其畜彘、其器宜深、其事宜藏、其日壬癸、其帝顓頊、其神玄冥、其蟲介、其音羽、律中應鍾、其數六、其味鹹、其臭朽、其祀行、祭先腎、其祭井、祀先祖、其牲彘、其穀豆、其畜彘、其器宜深、其事宜藏、其日壬癸、

立冬 同上 乾為立冬、十月節、冬、終也、萬物皆收藏 同上 立冬後十五日斗指亥為小雪 十月中、天地積陰温則為雨寒則為雪、時言者寒未深而雪未大也 **孟冬** 廣韻 孟、勉也、始也、冬之始故曰孟冬

析木 通俗志作折木、誤矣、當作折木 禮記鄭玄注 孟冬者日月會於析木之津

而斗建二子一亥之辰一上天 尒雅冬為二上天一是也 玄英 尒雅冬為二玄英一二日安寧註云氣黑而青故曰二玄英一 羽音 月令其音羽律律中二應鍾一

檀 歳華紀麗感二清商一而律變スト云云又曰擐檀遷改於歳餘 尒雅翼淮南子記二十二月之木十月檀檀陰木也周礼冬取二擐檀之火一○按ぐるふ律檀ハ擅木の火と取て律と改ぴるの義ふや、

十月 陽月 尒雅十月為二陽月一孫炎註云此月純陰用事嫌于無レ陽故曰二陽月一或始二于亥一生二于子一十月建二亥為一陽之始一故十月純陰而称二陽月一以陽根二于陰一為之始ト

良月 左傳魯公叔出奔衛三年而復スルニ上使下以二十月一入上曰二良月一也就盈數焉

玄冬 同上冬曰二玄一冬又曰二暢月一

冬 爾雅十月為二陽月一孫炎註云此月純陰用事嫌于無レ陽故曰二陽月一以陽根二于陰一為二之始一故十月建二亥一為二陽之始一故

冬

正月 月令廣義秦以二十月一為二歳首一為改二歳ト

もよふ又ハ冬來て九ー三日の心をもいふ、 時雨月 木の葉のおちのこる比月冬のそしめふ 何をそもまー定家 初霜月 同上草をはもまつお月のあさぼらけふぐらもろき 神無月 俳諧歳時記奥儀抄ふこの月諸人のとちつこと 長明 神出雲國の大社ふ集てめふ故ふ名づくとあり つれづく草ゑそ此月大神宮の御許へ諸神あつまりめふ故ふ名づくとのつり、又貞治の頃藤沢山の沙門由阿が万葉集の注ちーそ詞林采葉抄とらふそ中ふ一天下の神無月とハ出雲國ゑそ神有月とも神月とも申ふ是諸神の集ゑこそふ故くそ神在の浦ふ神々来臨の時ふ童の作まるが如き簗舟波の上ふ浮ぶこと数もちゑを諸神ハ孔浦の神在の社ふ集りめひて大社へ行めふ故ふ神在の社ふ不動山とらふ所ふ立こもめふ佐太大明神と申ふ是則傳奏の神出そはーまれと云云

この説異端に近しかれども出雲にあつまる事ありとぞ一天下のうち何ぞ神なしといふ月あらんや荷田東麻呂翁の説に神無月ハ雷無月也十月ハ純陰の月なれハ雷の声收まる故にいふ也六月を雷鳴月といふに對せりとこれ古人未發の論なり雷と神とのことをいふことハ萬葉に神の如聞つる瀧とよめるを後撰集にちはやぶる神にもあらぬ我中の雲ゐはるかになりもゆくかなと詠るを雷神也又伊勢物語に神さへいみじう又云神なるさわぎに云云此外證歌多し○青藍云世諺問荅云此月を神無月と申ハ伊弉冊尊崩じ給ふ月なれハ也云云貝原篤信翁ハ此月ハ卦において坤にして純陰事を用ひて一陽未復陽無の月也神ハ陽の霊陽なきことを神なしといふ云云なりといへども荷田大人の説至當といふべし此月諸神出雲國へ集りたまふ故に神無月といへる説ハ甚だしき妄説といへども俳諧ハ趣のをかしきにまかせて句作るべし

五元集 高砂や祢宜の湯治の神無月 其角

十月

黄鐘 律 月令 仲冬月律中黄鐘 高誘注云鐘聚也陽氣聚于黄泉之下也

大雪 節 月令廣義 孝經緯云小雪後十五日斗指壬為大雪十一月節言積陰為雪至此栗烈而大矣

仲冬 月令 仲冬之月云云

周正 月令廣義 通鑑云武王既勝殷乃改正朔以建子月為正月

復月 五月一陰生至十一月一陽生是謂一陽来復故以此月称復月乎

暢月 礼記注 暢充也言所以不可発泄者以此月万物皆充實於内故也朱氏謂陽久屈而後伸故曰暢月也 淮南子 命曰暢月注云以民人無事間暢故曰暢月

雪見月 藏玉 くもりつる空のならるしに雪見月けさこそ冬のあはれありなるも 有家

辜月 淮南子 仲冬之月命曰辜月

天正月 十一月建子周正月是暦家曰天正月

神樂月 藏玉 ならふぎてよめの宮居の神楽月

たのしさときき葉の音のさやぐきこ定家○露水云、陽乞わらんを、神の岩戸より出んを比して神楽を奏する月といふまでいまで、此月五節の舞ありと行ふ三条の御神楽ホと行ふもろこと名づけこもりもうつきこまことを暑して霜月とらく、藏玉風さむそむらん、

十二月 大呂 律 高秀注呂侶也、萬物萠動于下未能達見所以配黄鍾助陽宣化也、小寒 節 月令廣義孝經緯云、冬至功也、小寒後十五日、斗指癸為小寒、大寒 中 同上 小寒後十五日、斗指丑為大寒、季冬 月令 季冬之月云云、

臘月 說文 冬至後三戌為臘祭百神也、漢以戌日為臘、魏以辰日晉以丑日、礼傳臘者獵也、因獵取獸以祭先祖、蔡邕獨斷 臘者歲終大祭也故小臘月とらく、**涂月** 月令廣義 窮冬之月曰窮

窮月 礼記 季冬之月曰窮

窮年 文選舞鶴賦 窮陰殺節急景、凋年云々凋年ハ年の凋落

急景 月令廣義 窮冬之月曰窮 短急云云

月令 斗建丑之辰一曰涂月、**殷正** 夏以十三月為正、殷以十二月為正、周以十一月為正故有殷正之名、

凋年 景、凋年云々凋年ハ年の凋落

急景 日景短急云云

窮月 礼記 季冬之月曰窮

干次月窮干紀星迴干天數將幾終注云日月星辰運行至此皆迪故處也次舍也仁酋会、

霜蟭 蟭ハ月中ふ蟭蜍ありとらくより月の事を蟭とりく霜蟭ハ霜夜の月の事ふ、霜降ろまれば秋冬の月皆霜蟭とらくべし、陳暘義ふ我夜詠月詩ふ映霜蟭とそえるも純ど冬の月も限らじ、殊更十二月の異名の中ふ雜て増山の井ふ出せり、翰墨大全の意不審あや、**弟月** 此月年中月の終あり故ふ俗ふ乙子月とらく和の諺ふ末の子と乙子と称すれば、**春待月** 藏玉これてゆくく身ふそふむまを

とき春待月のいそうきこれ長明 **梅初月** 藏玉

花ハまくつわむそごうとほのゝそ梅もつ月のころいふ海ぬく、顕昭三冬月藏玉ふるときこそこゝろえくさ冬月ゆそうふつもる雪の註をさ定家

十月 亥の子

始 公事根源 先此月の三日ふ左右衛門弓場の堋とけの部玄猪のいむ始行るその日ハ天子も殿ふ出させ給ひて弓を御覧ある也、公卿以下束帯ふそこれをいる、天子御射席をうつせて弓矢を御座の左右のつきふゐそらる是と群臣とひとし〳〵弓を射給ふよしあり、誠ふ文武二ツの道ハ一をゝくべからざる故ふ武をもらさせ給ふまうり、○江次第ふ十月五日射場始注ニ藏人弐七日ゝ、五日ハ残菊の宴ふよりてゝ、兼三冬物

凍 字彙 孟冬いてう始て凍る、鮒 和名抄 こくなぶなの漸一寸五分、すふ満ざるものゝ多し、頭口大きく尾細し、これを煮食ふふ腥く佳品ふうらぐ冬月和ふ堅田通江の漁人多くこれと取、賤民貴

て饌とも 倭訓栞 時雨きやじさめ並びもてるゆゝ〳〵舩 千律師 勇魚取 万葉 伊沙那ぢらまり、いふ〳〵弓あそ射てころしとぞ、十一月 辛川祭 上酉日 夏のきの部三枝祭のあそるし、

鯨の頭掛 せの部節分いぬる年 詩経 来歳 亦莫の条ふ注もゝ、

ろ 十月 爐開

と 進爐炭 燔爐倉 事文類聚 十月の朔有司燔炉会とあもゝ、進爐炭と進、民間置酒して 呂原明歳時雑記 京人十月朔、酒を沃て乃ち門内と炉中ふ灸ゝ、團居〳〵そ飲喝ふこれを燔炉会といふ、

兼三冬物 爐すゑろ 和漢三才画会 地爐和名炭櫃の畧茶湯ふこれを用ふ只爐と称、方一尺四寸、

十二月 臘日 風俗通 礼傳云夏ふ嘉平と

いひ、殷ホ清祀といふ、周ホ大蜡といひ、漢改て臘といふ、臘ハ猟あり、獣を獵し取て先祖を祭るゝ、説文冬至の後三戌臘ム百神と祭る、徐鍇曰臘ハ合ム諸神を合せ祭るゝ、臘八粥うの部温糟粥の条ホ注ヲ、

蠟梅 時珍曰蠟梅一名黄梅花此者ヲと梅の類ホ非ラ、其梅と同時ホ因てあり、香又相近し色蜜蠟ホ似くり、故ホ此名ヲ得、大和本草蠟梅近年中華よりやくる、臘月ホ小黄花ヲ開く、蘭の香ホ似くり、葉ハ梅の葉ホ似て小ホて長し、木の高さ二三尺四五尺くり過ぎ大坂ホて唐梅とらふ、梅の類ホあらず、〇臘月ホ咲の義ホあらず、其花黄蠟色くの部蕙條の条ニ出ツ、

は

十月

拝墳 一日 夢華録十月の朔都城の士庶皆城と出て墳ヲ

のゝ

饗ヲ禁中車馬陵ホ

朝ヲ寒食の節の如し、

芭蕉忌 十三日 俳諧正風体の開祖

芭蕉菴桃青翁の忌日あり、泊船堂、杖銭子、是佛坊、風羅坊ホの号あり、又無名庵、幻住菴、

ホの庵号あり、十論為辨抄著支考 故翁の雅名ハ金作といつるよし、伊賀ホ四姓ありて、桃地黨の中の松尾氏ありとぞ、〇俳諧の名ハ宗房とらひ、落髪の後ハ桃姓のひさごより、桃青ともいふ、ありとかやおほふホ家名をとげざるのひあらん、十九の年ヨ官をうそきて洛陽ホ李吟ヲ師とし、武陵ホ其角、嵐雪と門人とせり、深川の芭蕉菴ホ隠遁ありしヲ三十六のとしありとぞ、風俗文選許六選 作者列傳云、芭蕉翁ハ伊賀の人ゝ、武名ハ松尾甚七郎宗て世ホ功を遺えとゝ、武のホ石川の水道を修して四年ホ成る、速ホ功を捨て深川芭蕉菴ホ入る、年三十七支考ハ三十六ともいふ 芭蕉翁正傳藤堂家藩竹二坊撰寛政十年印本 芭蕉翁桃青ハ伊賀國阿拝郡柘植村の人ありて、俗称松尾半七後ホ改て松尾忠右エ門宗房と呼、正保元甲申の年の生れありて、弥平兵衛宗清う苗裔ふりようて宗房と名づく、父の名ハ儀左衛門、母ハ豫州宇和島の産ゝ、桃地氏の娘ありゝ支考うの翁の碑名ホ其先ハ桃地の黨とやや今の氏ハ松尾あらんりと書ろハ、母の氏と聞あやまりしものゝ、弥平兵衛宗清ガ屋

敷跡今ふ存り、庭ふ大ある石の手水鉢あり、人々まこを名物ことも、其類今同郷ふ姓をこうつ、拓植氏松笑福地氏ホ是ゝあり、儀右エ門、嫡子卓左エ門、上野赤坂町ふ手跡師範こ以て家業ことも次男半右エ門ハ藤堂主殿長基の臣さり、三男忠右エ門芭蕉翁ハ寛文壬寅年藤堂新七郎良精の臣とある夫より嫡子主計良忠（俳名蟬吟）へ隨身をゝ伊賀上野桐雨筆記（桐雨ハ翁の門人蟬吟子猿雖の曽孫ゝ）ハ洛の季吟ふ俳諧と學び申さゝふ故ふ翁ゟこゝふ其門ふ入てゝいぬとさゝれ世の中ゟまこ酉の年ゝと発句あゝ〳〵十四歳の時ゝ明暦三ゟくるふ蟬吟子ハ不幸ゝし、寛文六年の四月世こ早うしまゝ故ふ翁ハ君臣の内風雅の縁ゝひとゝさゝあらぬ數のあまり、遺骨こ負くて高野山ふ登ゝ、報恩院ふ納くゝ六月帰國をゝその後ふをうに逍也の志ありてゝ二君ふ仕へざるよ」と告てゟるうふ其秋ふ暇こ乞ゝ申さゝ一ゝ京ゝ出ゝ、あゝくゆるしまゝうゝ其ゟらん同僚孫太夫ゝふ者の門ふ、短冊こ拈けくゝ「雲ことくろ友うや雁のいさゝふ一句こ残し國こ去ゝ

歴代滑稽傳　許六撰　芭蕉翁桃青ハ伊賀の産江戸ふ居し

て俳諧こ鳴る、桃青二十哥仙ことふ俳書こ著、二十哥仙摺吟の内、鰒声波をうつて腸永る夜ハ涙子ことおゝふ鯨の其声うゝ〳〵ゟ一ゟ二の弦いぶきくくうて、半房こ乱む」前後名こ出しゝる撰集ハ二十哥仙一部ゝ、談林の時俳書ふ長し日々向上ふすゝげ、終ふ談林こ見破り、はじめて正風体こ見留、躬恒貫之の本情こ探始て道の辺の木槿ハ馬ふくもれくゝこ申さんくゝ、天下こ挙て俳諧中興の開祖、正風の翁ゝと称し、侍る、天下の門人数千人のうち、嫡ふ正風の体こ得ゝるもの少し、初懐紙の項杉風嵐蘭其角、嵐雪曽良ホ江戸ふ在て随住ゝ其ゟうゝ故郷伊賀ふ立帰くゝる道の紀こ草枕ゟも野ざらしの紀行ともゝふ大津の千那、尚白、素堂三人師としてゝむ、辛崎の松ハ花よう〳〵朧ふ、此ときの事ゝ名古屋ふて、野水荷兮、いらこの杜国冬の日の俳諧こ撰し、次の春ハ初懐紙ふちらし、曠野ハ俳諧ゟらうふて、ふしかるし、大垣の如行、荊口ホの門人招て師とし頼む、野ざらしの紀行の時ゝあり、其後奥の細道の時大垣ゟり伊勢迄

とゝろに別るゝとて蛤の二見へうらと行秋ぞ又江戸ふ
帰ㇾそ、諸門人ふ正風の躰を勧む、又洛ふのぼりて去
来史邦、元兆ホをまねめ、初ㇾぐも猿も小蓑をもはせ、
と吟ㇾ〳〵く猿蓑と起をせ、膳所の曲翠、正秀、珍碩ホと
引導てひさごの俳諧あり、大ゝ趣き猿蓑ふひゞき、
その後江戸ふ帰ㇾ深川芭蕉庵と再びはをぶ、許六
此時ふまゝも、珍石江戸ふ来ㇾく深川集の俳諧と
撰をゝ楽うけの挑灯をあらて朝風汐さゝうる星川の
橋、愚老が俳諧四五年の後いをなかうふあると申
されゝ、支考、桃隣ハ随仕して江戸ふ下ㇾ、挑隣ハ江
戸ふ止り、支考ハ松島象潟の旅ふ趣き、菅の松原をと
撰をゝ、野坡、利牛孤屋とそのうしく、炭俵出来う、
又江戸ふて保生沽圃と勧め續猿蓑と手傳ㇾて伊
賀ふ帰る、杉風銭別ふ別座敷と云俳諧あり下ㇾ朝
支鑑芭蕉翁終焉記其角云此翁孤独貧窮ありとゝ
ども徳の風雅ホとめる二千余人の門巣ありて、老洛
ひとゝふ合信をる因と縁とその不可思議ふもとも勤
破をゞゝ、大和の頃ゟ武江の草庵ふ急火の難ふ

かゝまれ、潮ふひたる宮をとのがれて、煙のうちふ生のびん、
是ぞ玉の緒のそろかきたゝーあるや、爰ふ猶如火宅の
憂と悟り、應無所住の心を発ちて、其次の年ハ甲斐の
山里ふ身をうくし、富士の雪のくゝれゝバや、三更月
下入無我ゝらんく昔の跡もまつ〳〵好ㇾそこの人ゝ
嘆ーくて、焼原の旧草ふ庵と結びもゞーそろとゝ
むでき便りあとひく株の芭蕉を植置て塩ふ而と聞夜
ゝれ、といその世ふそれ時の吟ゝあるべ人ハおのつゝら芭蕉翁
とも喚あらく下畧此記ハ枯尾花集ふありて世ふ流布ㇾれ
ハ国ゝ支考ゝと對論あるゝる再案あれハ支考ゝ
惟然坊手記云翁難波あるく芝柏亭ふ一集もぐき約諾
まうしゞ数日重食ーのひ〳〵故う労りあるて出席あし、
発句のゝ贈らる、秋深き隣ハ何をもる人そ」此夜より
腹痛の氣味ふて泄瀉四五行、〻世のつゝの瀉あらんと思
ひて薬店の胃苓湯を服しあれゝるゝど験しもく、三十日
朔日二日とおうりしゞ次弟ふ度数うこまりて終う
かゝる愁といまりふゝり惟然支考内議ーているる良
醫ありとも招きこい半ゝと申れハ師曰我本元虚弱ろ
ころえぬ醫ふ見せ侍ゝて墓方いくあらん我性

木節あらで知るものあり、願くハ木節を急よびこ
見せそごん去来と一同ふよびあを談をごことも有ふ
ふそごとやく消息とおろべ〳〵とあり、夫より両人消
息をおこゝめ、京大津つごつゝしろる然るふ之道ゞ
亭ハ狭くして外ふ間所もあらく、多人数入こゝて保
養介抱もあるまじとて、其所此一軒と立廻り、我知る
人ありて御堂前南久太郎町、花屋仁右エ門とふ者
の裏座敷とかり受ろり、間所も数ありて亭主ゟ物
数寄ふ奇麗ご、諸事ゟ勝手ゟろし、其夜直ふ御介
抱申て花屋ふうつゝあひろり、此時十月三日ご四日車庸、
畦止、舎羅、何中ホハ師の不例ときこゝぞ、之道亭ふ至りし
ふ病こゝふ事と聞そごて花屋ふまゐる、病氣不虫損ふ
つさ寺問の人〳〵ゟも、そごうふ坐席ふ通るほごと張紙
と出そ、且仁右エ門ゞ断ると云云三日廿七行昼夜ご、天気
ゟもる、夜半過、去来きこる、二日朝の状、三日の朝〳〵く、
其座ゟり直ふ打こち、伏見ふ出しハ已の時ゟりし夫ゟり
舟ふ打乗八軒屋ふ着しハ亥の時ゟりしとぞ、直ふ御
病床ふ参こうしふ、師も嬉〳〵さ胸ふせまり、もごしハ

ものゝを宣ハざうしゞ、諸國ふらゐし人々ハ我を親の
如く思ひゟふ我老ぶれて優〳〵きこともあそれハ子の如
く思ふ事もあらく、殊更汝ハ骨肉とゝけし思ひあほべ、
三日見さるバ千日のおもひせりもろふ此度かゝる遠き
境ふて、難治の憂ふ罹り、再會あるまじく思ひ居うし
ふ、逢見るごの嬉しさまて袂ともわりあへ去来を
そゝり落るもごぬぐひて云、僕世務ふうとまゐけまハ
さぜる實意も尽さゞるふかゝる御懇意の御意とかう
ふる事、生ご隔つごも忘却仕らじ、数行の涙おもせず、
何様賣薬の効驗心もとなく〳〵て、去来又消息きゝさ
ゐて飛脚便りふ木節ふつゐらも、支考手記云同三日
の夜子の時ゟひつゞきて木節来る、二日出の両人の消息
その夜着せ〳〵ゟ名大津ご豆の時ゟろ、一番舟ふ乗り
しゐご短日故遅着、諸子ふそこくふして直ふ御容
體とうごひ、御脈ご診も、主方逆挽湯と調合ご、四日
朝、木節申さる〳〵ふゟり、朝鮮人参半両、道修町伏見
屋ゟり取同じ〳〵包香十五袋ごる、天気ゟり〳〵、之道ごこ
ゟり世話ふて、洗濯老女ご傭ひ師の御衣裳その外逆

中の衣裳ともそろ〳〵、園女より御菓子并水仙を贈らる、
支考、惟然介抱、次郎兵衛とても手届う〳〵之道取計ひ
とて、舎羅呑舟と云のまの来る、按摩をたのみける、今日
三十余度ふ及ぶ度毎ふ裏急後重〳〵、次郎兵衛手記云
五日朝犬草、乙州、正秀来る、天気曇る、寒冷甚し、時候
の故ふや師時々悪寒の気あり、次郎兵衛天満ふ詣て
昼をぎ帰る、今日師食〳〵みそ汁、索麺二箸〳〵、夜中迄ふ
五十度ふ及ぶ六日天気陰晴さま〳〵、朝の食乳面三
著前後よもすがら寝入りもやらず、いびきし給ふ、
目覚より去来ともち〳〵召して、先の頃野明う方ふ残し
置し、大井川ふ吟行せし句「大堰川波ふ塵ふ〳〵夏の月」
此句あまり景色過るとて、夏景色いかゝ〳〵と思ひ
居ろうしが清滝や波ふちりこむ枯松葉と作直
し一事柄ハ変りぬれど、同案ふ似ると人いえんもいぐまれじ、
大井川の句ハ捨べくんと汝ふ申しろうふ頃日
園女ふ招れて「ちぎ〳〵くの目ふて〳〵見る塵もなし」
と吟じろう是もち同案ふ似て句の道をぢ同じ、夫故
前の二句と一向ふ捨て、白菊の句を残し置んと思ふ、

汝ら意いかん、去来涙をうべ、名匠のかく名を惜ミ道
と重じ給ふ有ごとくよろづう句一章ふさまて千辛万
苦しろう御病悩のうちの御骨折、凡雅の深情こそ尊と
けれ、眼あるもの何者ろ此句を同案ととろぐぎ恐ろべら
此句を同案同意をぐ〳〵申ものハ無眼人と申者ろ、
その故ハ此句々景情ふ備ろて、句意と見る時ハ三句
ともふ別ろ、我ハ句の意と目ふ見て句の姿を見ぜ、青
苔日厚自無塵是隠者の高儀ともめでろる語ふ、園女
いまぐわうくして陌上桑の調あるとほめしろる意を
妙ふ語と妙ろう、世人此句をとるもの也、園女ら清節とも
らぐらんや、波ふ塵ふ〳〵の語ハ、左太仲が心非絲與竹、山
水有清音とろる絶唱もおのおの園女ら二夫ふまこえ
さる貞潔と大井川清滝の絶景と二句の間相〳〵ろ
つて感じても餘りいくと申せしふ、師も機嫌よくなり
しかり、去来手記云七日朝ろり不相應の暖気ふ曇
ろて雨ふし、薬方逆挽湯ふ加減、又乳麺とのこころみ〳〵、
園女ろり見舞とろて菓子ふ贈ろ、来ふ鬼貫来ろ、去
来應對ろて還ふ、園女、何中、渭川来ろ、去来支考食飲

も、終よ薬とめさゞ、終日くりる夜よ入て晴る人音の
静まりるとゞ、灯のもとを人々伽し居こう、乙州、正秀、
ホ去来よ申しくる八今度師り一泉下の客となりも
給ふ、此後の風雅いよ成行まづらん去来黙一て居こう
しが我も其事心おこりし故、二日の消息こゞきしやる
斯いそぎまおりこう、人々も左思ひまゝやさまゝバ今
宵閑静こ、只今の体よおそ一ほさバ、御快復覚束よし、
滅後の排諧ととゝ奉らんとてふづつよ枕上ふうがびよ
つて、機嫌とるらひ問申しくう、翁次郎兵衛よなそ
けをされ、息つきのひて曰、俳諧の衰化究ましまろ
まで真草行の三をそふまとぞ、其三より千変万化
も、我いまゞ其妻とめくさゞそ、汝此以後とても地を
まもるこゝとあれ地と八心杜子美が老と思ひさひ西
上人の道をもとゝ調八業平が高儀とうつしとまて
も我を世ふありこおりひゆめく他ふ化せらるこまろ
まいひこゝとあれども息虫損口うまろゞと喘ざるひ
るまバ呑舟卿口もこうるをそ又薬とまもらせてまろ
まろるくおのく筆と執て是と書をて惟然手記云

八日天氣快晴御不食ふり、京の虫損士来る信徳より消息
とゝもて御病体と問近江の角上より使来る人々勝手の
間ゟて今度の御所労平復と祈奉らんとて住吉大明神
小連中より人と立べしと去来申しまバぬのくまろる
べしと之道次郎兵衛闇にくうて社務林采女方ふ祝詞
とゝのこ厚く神納の品々贈らる奉納「峠こも鴨のさ
ありや諸きわひ文草「木ごらしの空見わるをも雀の声
去来「起こゝ声もまろき湯婆うれ支考「旦こうふ
竹のこゆ一やこそくの惟然「此外連中の大勢の集会ふ
まろまバ悦ひ奥しく師をおぐさめくう、木節去来ふ申
るバ今朝御脈をこうべ見申をふ次第ふ気力もおこ
うくのふとこうえくく脈体まろし、最初ふ食滞ようれこうし
泄瀉ふるとも、根元脾腎の虚ゟて大虚の痢疾ありゝ故ふ
逆挽湯主方ふり尚又加減一て心を尽をとこゞこ薬
力とゝゝこ願くバ治法を他醫ふかとめんと思ふ去来師ふ
申、師の日本節の申条花ふまこゞともいこふる仙方ありく
覚口竜蹄と醫をとゝと、天業つくぜん吾うく悟道一て
まバ我呼吸のうちん間バいろまでも本節が神方と服

せん、他ふかとおもふる心ありとのこまひろ支考、乙州ホ去来ふ何うらし申きゝれバ去来心得て病床の機嫌こうらひて申して云古来より鴻名の宗匠なりく大期ふ辞世あり、さぞどりの名匠の辞世ハあるうしやと世ふつものあるべしおもと一句を残しめうぐ諸門人の望こ応ぜん、師曰昨日の発句ハ々ふの発句ハ明日の辞世吾生涯いひ捨し句々、句として辞世あらざるハなし、か、我辞世いうおとそふ人あ〳〵ぶ此等ごろつひ捨なをし句、ぞれありとも辞世ありと申給ハゞ〳〵、諸法従来常示寂滅相、八旦釈尊の辞世ありて、一代の仏教此二句より外ハ迄古池や蛙飛こむ水の音、此句ふ我一風を興をこうら迄めて辞世、其後百千の句を吐ふ此意ふらざるハなしと申ふ次郎兵衛が側こうおとそふ以て句々辞世あ〳〵ぶるハなしと申給ハゞ〳〵、諸法従来常示寂滅相、ようと口と潤きふもとがひ自ゆうぎう詰つるく、支考手記八日夜ふ入て嵯峨の野明為有より粉こ贈り来る消息そふ今日まで伊賀より音信あり、去来、乙州申談しつること飛脚を立つきようく師ふ申されバ師の曰我隠遁の身として、虚弱ある身の、数百里の飛扶おもふ立親疾

よりとくめ〳〵ともどおろのはふせ〳〵我過ふり、今大病こ申ゆうあぞ一類中のさゝき殊ふ王公の聞しめしもおとまりくもとひ此度大切ふ及ぶをを沙汰有まゞと宣ひけう、師の慮ふこをだのく感心を、度数六十度ふ及ぶ惟然手記云九日諸子の取こらひとくて古き衣裳又夜具まどの垢つきこる不浄あるこ脱うしよき衣めさせふまおらも、師曰速地波涛のほとりふ草を敷堀こ枕として、終こと取つきこ身のうこる美々しき褥の上ふこうをこと未来ふこの友どちおぎく〳〵つきそひ鬼録ふ上ふこうんと受生の本望ふう、昨夜目のあをざるまゝ、不斗案し入く呑舟ふうせうおのく詠じめ〳〵旅ふやこく夢こ枯野こうけ週る」枯野とめぐる夢ごろとも一侍ふいつれふぐこそこうれ辞世おあ〳〵を、辞世おあらざるおもひらをこ病中の吟ふう、まつ〳〵かる生死の大事こ前ふ置ふぐこいふ生涯こ〳〵一風流といひふぐらこれこ妄狗の一ともふぐこ去来つ〳〵左ふあ〳〵ど日々朝雲暮雨の間も置こ山水野鳥の声も捨ふみをご心身凡雅ふらざるふく河魚の患ふつるものひふぐらいまのこさふ

其凡神の名章をとるくの〻と諸門葉の悦び他門の聞
えあれと、源もそう涙さそゝ、眼あるものの
旦〻と見ハ魂を飛さん、耳あるものゝことを聞ハ毛髪これが
為おどろん、列座の面々感慨悲想して慟絶し声ふ
こゑと師翁一代の遺教経、此日より殊更おとろくゝ、
度数をまさぐ、去来手記云十日初時雨せう、師夜の明ざ
より度数をまさぐ、一入あはれさのまさりて、折節ふ諧言あり
取ものみことばをし、木節此日芍薬湯をとる諸子うち
より食事もてあまねらせ々まてもてこみをも梨実を
のぞこのふ、木節くく制しくゝをどろきうふ望さあふ、胖胃う
故止ととゝえぎ〻ゝあゝとバ、一片味ひてあくあふ、胖胃う
くる所あり、死期ちかふあり、今日ハ少も食しところのち、惟然手記云
人心地付ふ今日ハ少も食しところのち、惟然手記云
十一日朝もくく時雨を思ひけるく東武の其角来る、
旦〻、東武のこゝろをと同伴ふて、叅宮の亭和州紀伊之行
めぐり泉州より浪華ふ行人〻、そらをも労おそと
聞つけそこ爰と尋廻り、漸くふうけつもてう、直ふ病
床ふ叅て、皮骨連立しもひる体と見まあらせく、且

愁ひ且悦ぶ師も見やりうるまであく唯〻涙ぐさうあ
其角をことをおくさ〻うのふき居うしと、大草吉
来支考其外の衆次の間ふ招き御病体の始終を物語
る、此夜よあけがう伽して、思ひよりしともあうう
居うりふ亥の時頃より〻て師夢の覚さる如く粥
と望そうあゝ人々うれしさうだりあく、次郎兵衛とを
そらひてとく炊きこのげくまめあらをを中うさ椀
おこ快く召し、翌日以来の食事ふ、土鍋ふ残を
たるをふ去来続ふ入てあしいうぎ、病中のあまりそる
や冬こもり、去来云趣向と他ふとめぞ、ひりあふ
事を口ぎさこて師をあくさあよあらせん、深く案ふ入
らぞと頓ふ句作りそあく、惟然ハ前夜正秀と二人そ、
一の蒲團と引うりく被うふをこ引こあこ引て、
よもぎうう寝入らざりそれハ果ハまらくと夜明るま
ぞ、其事をさぶひふ笑ひあひて引うくふうんふ寒き
わらひあれ惟然おりひあるる夜伽もさ〻冬籠正秀
一座旦〻と聞てつぎもどうとさらひくれバ師もさらひ
そあくり、初時雨の空晴さうふ、日影さ〻入くふ蠅の

おのづく日向ふむらぐり居うるふ人々繞もとし蠅をさ〜
うるふ上手下手あるを見もひておぶらく臭ふ入ぬひけ
ふど、大病中のをもあれバ忽ち倦みもひて直ふ寝所ふ入
もふ支考ハ師の誄句と滅後ふ一集せん心願あれど、此
ころの病苦ふおゆるもつふ見合せ居うしふくふ機嫌
よさふ乗じて申出侍らんと申〜しうりもまバ去来うみて
師の心中を知うし故ふ犬よ怒りこぞう〜きことを申
もの〜ゆ師ハ平生名聞らきき事このミ給ぶど今日漸
く快き体を見うけもづて諸人うれ〜と思ふ中ふ御
気おさうふことを聞せ申てそ御心を労〜め申そこと
奇怪ありこの後御床ちくくよりうのふふ早く其座を
立ぬて〜と声あらくふ次の間ふ追立うり支考もちらバ
もの〜ゆひ出して諸子の聞前面目をうゐ〜おひ〜が往々
惟然ふ打むひ我ふ句ありそこ書もて〜といひてちら
もて次の間おころ寒うゆ支考ハ〔支考〕さすが支考ありそれ
師もものきこゆひてをうゐ〜がりもひうり〔聞とりて菜飯
たうまろ夜伽ゆゆ木節」こふあ子あり蓑虫寒く鳴尽
もこ別「うつくまる薬のもの寒うゆ文草「吹井より

雀をおねのんそつまごゑ其角」一々惟然吟声〜それゞ師
文章ゞ句を今一度と望こゆひて丈草出来さゑこうり
きこそもさひをうりとこのひうり面白しとおそゞゑて
声もてほゆゆひうり〜ふうそうし師の機嫌のうるし
きをゑ悦びうるふ木節一人愁をいぐうる体おそうれバ
其角その故と問木節云病ふ除中の症といつるあり病
中絶食あるふ俄ふ食のまもむこと損症ふ死期遠き
おわらぞとのべりさいまうぞゆ居うるふ
夜半ごろより又寒熱往来ありて夜明ごろより顔色
土の如くうゆひおぶ〜くハ悶乱し人もこをりこまそ
ざうしが良ありて又賓恋ふまうゆひ左右ふ舎羅呑
舟うしろより次郎兵衛抱きまゆらせて介抱しほど
なく夜明ゞゑバ十二日あり〜かひてハ閉こもりこゆひ〜が
ゆごその障子もふをまをを取そゆさせ去来其角丈草
とうゑふこと招きうひ機をそぶうゑふハ思尺〜こゆをと
ことわり行水とのぞこゆふ木節もきこうふ制し申をを
どもおさうふ望こゆもふ止をまこえぞ湯とまゆらせう
座をそづふあらくめ木節ゞ醫術と尽され〜ちそ

おどつらくふ謝しまひさて三人の衆ともうく召れ乙州正秀と左右ニ、支考、惟然ふ筆とらせおき跡のこと
こまぐと遺言しまふ、病苦をこもそとみつゝ人々
奇異の思ひをまくり、伊賀の遺書ハ手づから認めまひ、京江戸美濃尾張ともぐ〳〵の遺言〳〵ふ玄門人筆記ニ、次第ふ声ふそうろう疾喘ニて虫損ハなし、次郎兵衛湯ニて口をうるわしまおらせ〳〵、良あり〳〵去来ふひろひまひ、先こゝろ賓永阿闍梨より、路通ゞ事仰ありその後汝ゞ文草乙州ふ贈りし消息露霜ニハ捨置ニて、併ニこゝろぐるとありて、雲井のよそふいまし侍るうまゞ数年の薪水の労やめ〳〵ともれ置ぞ我あき跡おいよそふ見捨こまゝぞ風交しまへ〳〵ニこのとたのこ侍る諸國ふも傳へおらまう〳〵と、いひ終てこまひて餘言ハ会掌正しく、観音経と聞えてふとう息のかよいも遠くまり、申の中刻ニゞて、埋火のごとまりのさひゞが如く、次郎兵衛が抱きまおらせうふようにうく死顔うまう〳〵く眠しるごと期ごうて物うちうけゞり時ふ元禄七甲戌年十月十二日、御歳五十一也、即刻不浄をきよめ、白木の長櫃うち

収めまおらせその夜直ふ川舟ニて、伏見まで御供し奉る。
其人々ふハ、其角去来大草乙州正秀木節惟然支考之道呑舟次郎兵衛以上十一人花屋仁右エ門ゞ京（荷物を送る体ニて、長樋の前後と取まき、念仏誦経おひくふ供養し奉るハ幡と過るころ夜もふくと明そふまるふ、僧李由の下さまつる舟ふ行あひまバゞごとて乗うつり、相とかふまれき物くりしてをふ〳〵京橋ふ着、夫より狼谷通りふかくり、いそぎふそく程ふ十三日巳の時まぎふ大津乙洲ゞ宅ふ入奉うとうり、御沐浴ハ之道呑舟次郎兵衛ゞ御髪の伸さまつるゞ、月代ふ丈草法師まおらせうり、御法衣浄衣ふハ、智月と乙州ゞ妻縫奉る浄衣白衣ニて召さまおらまゞきそ、羽いうまるとふやうにて茶色の衣装ことよくまことゝまゞて茶色と召まるまバ智月尼のそらふとて浄衣も茶色の服ふまられるゞさて葬式ハ十四日ニ終り云〻、終焉記云湖南の義仲寺ふ棺と移〳〵て、道里遠境の名を傳うる人ハほゞまるゞまるふそまりて凡三百余人あるゞ〳〵墓ハ木曽殿ふとまふてあのづから古ひうろ柳もあれがまゝて、終焉のちぐまるやとそふ野面の無縫

塔と書給びおら垣と書給ふ、冬枯の芭蕉と植て其名の記念といまおせりりゝ、實や此ふと所いまぞら山や音羽の峰もちゝゝまこ、鳥のさゞ波も多ふおせて、漕行舟も觀念のくちうりおらぎや、樵路の鹿田家の崖をへて湖上の月ふ映じて此廟前の風景とまゝこゞ、遺骨も永く此地ふ清らんさらばそのさうひもそろうふそわごも遠く、凡のくちうふ我翁とそうくん人ふ愛ふ此記とめて囲向の便りとそ、

古今以上考證ともあるべき書どかまり拙出ま、小文庫

芭蕉忌と申そめ

ゝり三囲忌　史邦

初雪、初雪消

初雪ふ積らぬさのふまる

ま故ふ消るといひても冬あり○

初雪見参

公支水源

初雪や水仙の葉のたゞむ迄芭蕉

むう〳〵初雪のふる日、群臣参内し侍るを初雪の見参と申〳〵、桓武天皇延暦十一年十一月ふりそゞまる、初雪ふうざらぞ、深雪の時ふ必諸陳見参ともるあり、此支絶て久し、

初霜

霜の注ふ〳〵の部

初氷

同

初見草

冬菊の異名ま、

藏王ちゞまる庭ふゝゝも初見草花さきそろる、霜や置らん、

兼三冬物腹立

鯛ふの部河豚の条迄、

そゞし雪

真洲翁云そゞれいまざらとそゞしとよむ、

のこるらぞ霜ふ

賣炭翁

炭賣とふふ同じ、万葉ふ雪

曳氷

透簑賣炭

鷄

韓琦　廣陵大雪詩　醫奥江

野翁泥发輪

鶉　鷃、負雀、和名よのり

たゞ和名ふ俗云そい

物ゝ鷹の雌ふいおらも別種あり遍身鷹の如く黒き斑あり腹ふ黄黒の斑ある理あり赤白斑ふ交る者あり又胸腹灰赤色ふ黒赤の斑を交へ背純ら黒く光を含ひ者ゆり、

隼

鶻鷹音骨　和名八波布佐張丸齢曰鳩を隼とふ雄を鶻とふ蓋鷹ハ伏〳〵くるゝと雖ら懐胎の者ふ遇ふときハ輒ち放て殺さそ鶻ハ鳩鴿及い小鳥と撃以て足と爲ふこれを縦と此鳥東ふ行ときハ是日東ふ往て物と撃らそ西南北まこ然り此天性の義ふ隼ハ状ち鷹ふ似て蒼黒胸腹灰白ふ

して赤を帯、其背腹斑の文あり初毛ハ白し
くろまで、毛と易て後略鷹と同じ全体奮鶻似ど

十一月

鉢叩 くの部空也忌 **袴着** かの部髪置の条ふ注を、**初鰤**
六月五六寸津波須とらふ夏のつの部つそその条ぶ
うぐし、和漢三才画会 仲冬長じて三四尺最大ふるもの
五六尺鰤と名づく、腊として冬春ふと食ふ脂多く
味厚し、丹後を上とす、此少きよう老ふ至る時名と改む、
初ハ江海ふあり、徐大洋ふ出ふと東北の海ふう連行し
て、西海對州ふ終る、出世昇進の物とこれを大魚と称、
貴賤相饋て歳末の喜祝とす、**初深雪** ふらそて積
ふらふ

十二月

猟の枕、猟の札 説文 猟ハ熊ふ似て黄白色ふ多く鐵と甜て千斤と消ち、其皮ふ敷ど悪夢を見ずとて俗ふもちふ、俗説ふ猟を夢と食ふ畜ふりとらく、**早咲の梅椿** 梅椿の両種特ふ早く咲出るもの

あり泉州堺の浦の人、十月梅椿と京師ふ贈る、茶人特ふことと酢びて茶寮の観とす、**晩歳**

月会廣義 蜀の凡俗晩歳相餽問、こまごまと餽歳とらふ、**春の隣** 藻塩草 春の但し晦日ふ限らざるの 古今俳諧哥 冬こもらら隣歳の暮ふ、
そその隣の近々ハ中垣よりそ花ちらら深養父

急ぐ、春と待、春近き 歳の暮の容情

兼三冬物

鳥入 うつつり 大和本草 鴛 字書云曰
て小ど、又本草ふ載る鶺鴒もいつつりまづし、鶺鴒
順和名抄ふ二ホと訓ス俗ふ鳥の字と用ふ鴛と鶺鴒
と一物二名ふ、本草ふ鶺鴒大さ鳩の如くして鴨脚
陸行てあるごとく、常ふ水中ふ在て人至ればし沈む貞享
式鳥ハ鳴声も寒気ふて、俗語ふいつづりともふれど、
俳諧ふハ名目の自在と称してふ用あづき
ふり〇鳰の巣ハ夏ふ、夏の部ふ見ゆし、**煮凍** 煮凍ふるく、**胡蘿蔔**

時珍曰胡蘿蔔元の時始て胡地より来る気味蔓菁に似ざる故に名づく、

十月

新嘗祭

中卯 公事根源 今年の初稲を神に奉らるゝ、御代の始りより大嘗会や一年毎の祭ごと新嘗会といふ、卜食の人々摺衣日陰と者も、用明天皇一年四月より始む、庭燎の部神楽の部鷹の薬 新王津条ふ注も、錦の帽子 とある条は注、

島火焼

十二日 俊成卿勧蕃之五条の南、烏丸の西王津島町ふあり 紀事 昨今冷泉家多く恭詣を或ハ法楽の和哥あり、九この門前一町ごとに市人神前の御酒と冷泉家ふ献る時 鶴始巣と ほ ハ酒食と賜る、雞乳 くとつる条ふ出ッ

十月 法勝寺大乗會

廿日より ○當寺ハ廿八日まで 白河法皇の皇居なり、その後天台宗の住持聖道衣あり後醍醐帝の勅ふよりて律衣とある、今寺絶て岡崎村の數中ふ諸堂の跡残る、九重の塔の跡村の南ふ有て塔擅と号す、糸櫻の名所あり、風雅集浄妙寺関白立よ〳〵で過ぬと詠で糸ざくら心あてのる春のまの本一説ふ當寺ハ南禅寺の西北、新黒谷の南あり、ふの地ハ白川の大臣忠仁公の別業ありて、寺ハ白川院の御願なり、當寺の九重の塔、浪速の浦ふうつしとつふ、

無三冬物

樏

くせ と掘出しと 材ふ伐て取る木ハ根根骨とらふ山家女冬ごのろ炉ふ昼夜こゑ〳〵と焼く寒と凌ぐものあり、関東ふて 糸切歯 ふ樏ハ昼夜おくものふあらず、灰をおゝひ埋火とし、夜明る迄寒と防ぐ用ふ、

干菜鉤

採て簷下おりけ、陰ふ干果とものふ、乾を、喚て懸菜と号、

十月 報恩講

御仏事 御講

廿二日より廿八日まで〇親鸞上人の忌日あり、上人ハ内九の後胤、藤原の有範の男、伯父範綱養ひて子とも、字ハ善信坊、名ハ綽空又範宴と更め、初め慈鎮と師とも後源空の弟子とある、弘長二年十一月廿八日

寂そ年九十一浄土真宗の開祖ぐり、東西本願寺十月廿二日より廿八日まで報恩講を修そ、京江戸在家宗門の徒、参詣群集そ、或ハ御霜月と称そ、又御講ぢ、昨今時ぢて天気快晴あり、俗ふこゑと御講凪ぢく、

十二月 星佛賣 十三日 紀事 此月十三日大佛師未年の属星の形を彫く禁裡ふ献そ、民間うも亦この事をまそ、故ふ人家各星佛を買て帰依の僧を請きそこととを祭そ、故ふ市中星と賣者あり、所謂日曜、月曜、木曜、水曜、火曜、羅喉、計都の像あり、

冬瓜 時珍曰冬瓜其冬熟をるを以てなり、貞享式 此名ハ俳諧の自在ぢく、冬瓜と音ふよび、或ハうもりと訓ふのく、中古ハ総て秋季とふせり、さほど秋ふ冬の一字より、霜を待て賞をる物あれバ西瓜と秋ともせる加減より、

東福寺開山忌 聖一 冬瓜と冬と定むづきまり、忌之、

其三冬物

鳥叫、鳥立を慕 部ふ注を、

た の部鷹 狩の条注ス、

海鼠 ふの部生海鼠の条ニ出ッ、

十一月 冬至 月令廣義 大雪の後十五日、斗子ふ指を湖且冬至 一陽の嘉節 冬至とそ十一月の中、陰極て陽始て至る、日南ふ至る、漸く長く至るゑ 玉燭宝典 十一月子ふ建す、間の正月ニ冬至日南ふ極そ景極そて長し、陰陽月万物の始ゑ律黄鍾ふ當る其管最も長し故ふ儀長の賀あり、〇朝且冬至、季吟云十一月朔日冬至ふあくることあり、廿年ふ一度まるるとあてめでたき瑞祥ぢうふよて、其日ハ天子南殿ふ出御ありて、旬と行えせさるひ、公卿賀表と奉ることあり、〇一陽の嘉節、季吟云、十月八無陽の月ぐ冬至ふ一陽来復せり、孝経の説ふ冬至ろ三義あり、一ハ陰極るの至ぐし、二ハ陽気もじめて至る、三ハ日南ふ行くの至ぐし、故ふ冬至ぐして、

童女御覧 との部五節 豊明節會 小忌衣 日蔭蔓 日蔭糸 心葉

江次第 新嘗会裏書ニ云、毎年十一月中の辰の日行之、豊の明の節会是ぐ、天子新穀を嘗む、故ふ新嘗会

とりへ云云 公事根源 今年の稲と神ふ奉らせおいて、今日君もきこしめし、臣もたまふ故ふ節会行ふる、新嘗の祭てとる、上卿、宰相、辨、小忌衣と着る余人ハ諸司の小忌を束帯のうへふ着ふるとなり〳〵いふるゝ〳〵ふ着ふるを摺と用ふる、上卿宰相辨の上首を勤む南殿の廂ふ元子とまうけ、内辨已下座おちく〳〵、白き酒黒き酒の盃をもり、大哥の別當もおわりて舞姫のぶり五度神とのゝ〳〵てうと入事ふ堪ふる上達部五節所とゝゝひて催馬楽おとゝゝふ節会の儀常のことし 下畧〇小忌衣 奇服小忌の青摺小忌の袖、山藍の袖、或記云小忌の文竹桐夏ハ堂うど冬ハ堂くゝ舞人と奉る時拝領すとゝえとり、年少の人ハ私おもとと調へ着用をとゝふ、大嘗会豊の明の節会ふ用ふ件の節会ふ小忌の袍と着用を、其時関掖の如し、但身一幅と、狩衣のすふ法と用ふ又白き袍を粉張おして藍とまり、後ふ堂くゝ裏おゝ、只一重と又小草、柳、水草、蕨蝶小鳥ホと山藍の葉ふく摺又諸司小忌とてくおり、建暦の度麻布麁悪のものと 和訓栞 小忌ハいと畧を、大忌ふ對を、此大小ハ麁細をとふと〇日蔭蔓、日蔭の糸 和訓栞 延喜式ふ日蔭の蔓とゝゝとり、古事記よ天の日影とのひ神代巻よ以蘰為手繦とゝとり、松羅一名女羅是之、とゝども別種ふゞべし、今狐のとうせんそいふ物是之新拾遺ふ玉ひげともよめり、大嘗会ふ用ひさせらるゝ、式おくりく出さとり、今白糸吉糸おを組て、冠の左右ふ垂させらるゝ、其表物之、とのゝうへそ日うげの組ひうげの糸ともそゝとり、さそ盤戸ふ神のこもらせるひ〳〵時るゝハ日影さ〳〵出んとを言壽てたもきふちをそまくるまりとらくゝ、〇心葉 和訓栞 大嘗会ふ冠の上ふ懸るかのゝ祭主おとハ賢木の枝をさせり、神代の巻ふその上ふ白ふ青ふ赤ふ黒ふ五色の糸ふて造る大臣ハ藤、大銅の梅花之、とゝえ萬葉集大嘗会のさゝめもさゝえとり、今主上ハ櫻の挿頭おて造るふ滅金と用ふ、東三中納言ハ山吹、恭議ハ梅し、やゝ多

條の御神樂

かの部神楽の条よ云、

ふ出、

道祖神祭

十六日 指忍天王寺領、天王寺村ふあり、祭る所榛田彦命ふ人

この日一村の童あつまり、往来の人ゟ銭ともに乞ひて祭礼の料ともし、銭とあるごとく、さま〴〵戯れゟ縄を以て往来ゟ遮り留むようてこのことをもつぱらとするもの、商買とつゞくもの今日此處と通らゞ、但塊の魚荷飛脚ハ故まうく道路こゞらひ、酉の市 酉の日 伊豆國賀茂郡 鵜の ふうとぞ、

三島の駅ゟあり、

町詣 まちまうで 酉の日 鶏大明神の社ハ武州葛飾郡花又村 ゟあり、江戸ゟ三里 毎年十一月酉の日市と つ酉の日三ツあれバ三日とゟ市もり、上の酉の日と専 ゟそ、江戸近在ゟ諸人群集して甚ご賑ひ、昼當 社神事の遺意ゟ、土産ゟ芋うらと賣ゟ、恭詣の人必 これと買ひて家ゟ帰る、又此日浅草寺の裏手鶏大 明神ゟも此市 和漢三才畨会 單葉の冬 あうて群集ゟ、

冬至梅 至梅中花ゟて紅ゟ冬月 ひらく、八重ゟて

十二月立土牛童子像 花浅紅の者あり、

公事根源 大寒の日夜半ゟ陰陽師土牛童子の像 と門口ゟそろ青黄赤白黒の土牛と、門々ゟ春夏秋

冬の色ゟ随ひてうつる慶雲二年天下疫癘さろ ありて百姓みろく失うしかゟ土牛を作りて追儺と いつゝもちゞまりき異國の書ゟハ農事のくろゟふ時を 示さんとて、土牛と立ろうしろゝえさう 延喜式 土偶人 十二枚 高サ各二尺 土牛十二頭、

豆腐蒟蒻を永らも 製法 本 朝食鑑ゟ

年忘 歳の暮ゟ親戚朋友を會め宴を設く こゝと年忘とらふ、是年中の労を忘て 意うき、

年木樵 春用つる所の薪を年内ゟ樵置く是 命四監二収二秩薪柴一云云又云孟春之月禁止伐木 淮二以二盛徳在一木也一云云然ゟ春ハ木を伐らぬものゟふ 年の内ふ春の薪を伐ること 憚あることふこそ 天木

高島の杣山川の筏士ハろく年木を積やろふらん、

年の市 未春用ふる物を悉く賣るまう 五元集 年の市ろれをよぶ〳〵羽織との 其角

年の終の魂祭 秋のこの部魂 年内立春 祭の条ゟ出、

古今 年のうちふ春ハ来みそ〳〵とやらそん○貞徳曰年内立春和哥の題ハ春の部ゑて、代々の撰集ゆゑく〳〵ハ巻頭ふ入らる、連哥よハ冬ふ用ゐ、俳諧又冬ふ用ゐ、年の暮 年の夜もあり年の暮 芭蕉 古今 あらくみのうらのとまやまろうど 年浪あらく 新勅 とめてやあれて在原元方 年浪あらく 続古 もろくとなひく年の水ハまろうどもあ〳〵道助親王 歳の末 未の松老の浪こそやもくこえくもと 年の湊 春の湊ふ準領子内親王 年の際、年の名残、年の冬〳〵、年の果、年みち 各学義の如し、年籠 滑稽雑談 和俗大晦日の夜灵仏灵社へ詣て年とるを、是を年籠と称し、諸国ふあるとゑそて其国郡の神社佛閣あくこもりとゑ、京都そハ伊勢熊野あど、近くハ祇園清水愛宕八幡あぐくそるあり 猿蓑 それてゆくとしのまうけや伊勢熊野去来

十月

兼芟物

茶の花 如〳〵、花ハ白薔薇の如く、実ハ挺子の如し、注ニ云瓜廬木ハ広州ふ出ツ茶ふ似て至て苦く渋し、挺子ハ蒲葵の属云云 陸羽茶経 其樹瓜廬の如く、葉ハ栀子の

力草 たの部鷹狩の条ふ注セ、千鳥 鳥島千鳥 濱 和漢三才畫会 鴴音衡 千鳥俗萬葉 小夜千鳥 集乳鳥ともよべり 千鳥 村千鳥 浦千鳥 磯千鳥 川千鳥 夕波千鳥 在て百千群ともよべり 千鳥と称ふよて千ふ似て大ニ其頭蒼黒頬白く眼の後ふ黒き條あり、背蒼黒く翅黒く腹白し、胸黒く嘴もまた蒼黒し、尾短く脛黄蒼ありて細く長し、冬月最も多く水上ふ飛鳴き侶をとふ九鴴の種類甚ぐおほし〳〵四十八品ありとぃふ、 千鳥足 大和 本草 雀より大ニ、前三指後指あり〳〵歩むふ足を左右うちぐてそるふ人の歩むことこれふ似ゐるを千鳥足

と云、**十月** 智恵劣 たの部大師講の条ゟ出、**十二月** 着鈦政 公事根源 五月ゟ同し、是撿非違使在京軽重者鈦若盤勘 ○頸ゟ在と鉗こゝゟ足ゟ在と鈦と云刑具ハあり、 延喜式 凡罪人者随罪冬之節 素問注 立冬ノ節初五日水初て氷る、後五日雉大水ゟ入て蜃とまる、

ね 兼三冬物 偷立鳥 ぬきさう鳥

たの部鷹狩の条ゟ出づ、 **り** **十月** 立暖鳥 条う注ゟ、 **る** **十月** 御影供 御会式 十三日 日蓮上人の忌日ゟ、春の弘御命講 法大師忌を御影供とゟふゟ紛ゟ故おめでとうとゟゝえ」とめと通ゟ、影讀ゟ「めんとするのゟ」日蓮上人傳え亨救書ゟ載ゟ、日蓮上人ハ房州の人三國氏弘安五年十月十三日寂を年六十一後醍醐天皇勅して大菩薩の号と贈ゟる蓋洛

北砂頭寺の秘実両と祈るの賞ゟ因つゟりとゟ武州千束郷池上村長栄山本門寺ゟ」終焉の地ゟ、唯今宗門の徒佛檀を掃除し、紙ゟ敷し、ゟ造りゟ化とさゟゟゟ、五色ゟ染ゟる餅と供ゟ ○御余講ゟ油のやうゟ酒五 針 芭蕉 **御取越** 一向宗門の徒此月親鸞上人の忌を修ゟ、忌日ハ十一月ゟ故ゟ、御取越と云ふり、 **大社神事** 神集 土日ゟ 神在 十日まで 大社杵築大明神の宮ハ出雲國杵築村ゟあり、大己貴尊、孝安天皇三十二年垂跡昔ハ宝殿高ゟ三十丈、今減して八丈、後深草院宝治元年八月廿九日建立、三条院應保元年始て三月会行ゟる、○毎年神条七十二度就中十月ハ殊ゟ深秘の祭とゟふゟ、十月十一日ゟり十七日迄と齋と称ゟ、この間凡烈しく波ゟらき日一蛇化度」藻ゟ乗ゟて海濱ゟ浮む人ゟとゟれでゟゟゟ國造へ許ゟその人ゟ褒美ありこの龍蛇と曲物ゟ盛ゟらゟ神殿ゟ納とらゟその蛇の形蝮蛇ゟ似て銭形の斑文連ゟ又五色の彩色重ゟるが如し、尾先ハ魚尾ゟ似て

岐あり、屈曲して宇賀神のとぐろを、尾越の鴨 貞享式 此名あるもおとし、神祭第一の物とす、俗習ふ鴨は件来の道と定めて、山の尾寄より越る故とぞ、然れど初鴨を秋とはし、鴨とぐろと冬ごとにめぐる名は殊に俳諧 兼三冬物 小野炭 山城国小野の里より出るをいふ、温石 大和本草 山東通志云掖縣より出、色青白を兼ぬ、潤膩玉の如し、味甘く毒なし、薬物に備ふべし、日本も温石といふ物あり、色白くして少く青しやはらかなり、是山東通志にいふ所と同物なるべし、落葉 この部木の葉の条に併せ注を、追鳥狩、を〳〵草、落草、呼声 各たの部鷲と狩の条に注を、鴛

鴛 とりの劔羽 和漢三才図会 其羽毛五彩にして頭に玄纓あり、頸に紅糸あり、背に小き羽あり、摺扇の半開のごとし、俗に劔羽と称す、九十月多く至る、家々庭池に養ふ、然も鳧鴨と同居して鴨

八蒼色みて目の後に白き條あり、翅尾黒く腹黄赤黒の紋あり、 大和本草 鴛雄相愛して相離れず他鳥に異なり、東垣曰二其一を失ひ朝夕思ひ慕ひ鳴叫して死す、昔猟夫弓を以て其雄の首を射切る、其雌一隻あると射殺してくらふ、翅羊又其水辺を通る時、雌一隻あると射殺してくらふ、翅の内に去年射とりし雄の首とりおきて、まむかひのつきに羽うそぶきけしきそ〳〵つまあらそひの 鴛鴦 ○思羽の證哥との義の条ごとし、

七省 鴛鴦の姿の省に似るをいふ、古哥こやの池つゞみそこの一つびに誰ゆゑ省のうきねしつらん 五海集 その省や張良と〳〵あそびまで足 支直 鴛鴦の衾 西京雑記 趙飛燕皇后ざう、其女弟昭陽殿よりおくる書に鴛鴦殿よりあり、飛燕より遣る書に鴛鴦の襦鴛鴦の被鴛鴦の褥云云 壬二集 霜ふかき衾のおもひざを千世をかさねる病の池水 ○鴛鴦を縫ものゝ、或は画きそこの衾とも褥ともふあり、

十一月 大原祭 中の子日 一年に両度あり、春のとの部に注ぎ 小忌

衣との部豊の神遊かの部神遊

明の条に注ス

御火焼

庭火の遺風ト、凡此月諸社ニ於テ之ヲ修ス、○朝日智恩寺鎮守賀茂明神、○四日上出雲路幸の神、○八日所々の稲荷、凡ソ先祖日ヨリ稲荷の氏子の児童、小キ神輿ヲ造リ、朔日より市中ヲ振リ、人家ヨリ米銭ヲ乞ひ、之ヲ以テ八日の火焼料ヲ営ム、八日の新御供ハ社家松本氏調進ス、○同日安居院有栖川の宮、並大坂高津の宮、玉造リ稲荷天王寺庚申、○九日貴船結神、○十日太田の社、九条天神、○十一日栗田口神明、○十二日生玉、十三日三津八幡、○十九日所々八幡宮、并ニ今宮所々神明吉田岡崇天王並ニ之ノ社、○十八日上下の御霊、○廿三日貴船、○廿九日北野、その外神社毎ニこの月會日ヨリ榮を神ニ刃ふ積ミ、神酒を供シ、児童のち火ヲ投シてこれと燎シて、児童口々ニ某の神の御火焼と拍ス、帯解の部髪置の条ヨリ注ス世俗おの部ふかの部ふ注ス世俗おも、

御神事

報恩講トふ、○増山の井ふるそう、

御祭

日の使 掛鳥 廿七日 春日若宮の祭あり、本社を後日の能 廿七日 出ることと一町ばかり平林の中ニあり、

法要集若宮御殿天押雲命トス、然ども若宮社家秘記トそ、紀事南都若宮の祭夜宮共ニ日奥福寺の僧頭屋田楽あり、凡頭の僧一人両頭と云ふ、ふ両人の義を兼ふあり、長谷川寛春日の社ふ恭詣、野太刀を携へ馬ニ乗ル、ふ遍照院の渡と云ふ、御旅所の前ふ於て流鏑馬あり、夜亥の刻ばかふ若宮の神殿ふ神幸あり、神楽詑つて後燈燭を消し社家各神体と擁護もそふして闇中旅所ふ迎し奉ろふふ於て燈火と張つて、音楽相撲ホ次第ふ云ふこと修そ當日廿七日ふ行ふ、式日あり、寛正年中ふれを定む、巫女及び伶人田楽申楽あり、供奉の僧奉行職人松の下鳥居の南の方ふ於てこれを楽人上越後守騎馬ニて供奉ス、是ニ関白代と云ふ、又陪侍楽あり、田楽芸術と施し、猿楽開闔をつふ云ふと松下開闔とつふ凡猿楽の始ふ、股太夫新れ吉事の詞を作つて万歳と祝ス、ふこれを開闔の詞と云、

その後舞曲もじまる、金春金剛の両座太夫供奉の時、船の立合と舞ふ、観世保生両座の太夫供奉の時、弓矢の立合と舞ふ、大小の鼓と以てこれを拍て、殿後ゟ大和国と領ぜるの武家、各鞍置馬長柄の鎗を出し、奉供の行列あり、夜ゟ入て旅所ゟり還幸祖神幸の義ゟ同じ、〇日の使とハ関白殿下ゟり奉らるゝ騎馬伶人是あり、黒袍冠の巾子ゟ藤の造り花をそゝるゝ、もの祭ハ人皇七十五代崇徳院御宇、天下大ゟ饑饉し三年又大ゟ疫癘あり、関白法性寺忠通公、この祭礼の大願と発しはじめて天下静まるゝゟりて毎年行ゝとぞ、保延二年丙辰九月二十七日、られこの祭のもてまり〻、〇掛鳥とらゝゟハ、春日祭のとき、鳥獣と以て贄とせるゝを掛鳥とらゝゟ、雉千二百五十六羽、兎百三十四耳、狸百四十二匹、是又保延二年ゟりもてまる、春日ゟ先規ゟり地侍として六派あり、平田、長川、長谷川、葛上、乾股、鷺奈良の大宿所ゟおつまり、掛鳥の事を主まり、〇後日の能とハ、春日祭の翌廿八日ゟ、能芸を施をとらゝゟ、まづ前日旅所の前ゟおいて、流鏑馬伶人の舞相撲、細男舞田楽ありて又翌廿八日猿楽まり、故ゟ後日の能とらゝ

十二月

乙児の餅

一年中の朔日の終まり俗ゟ乙子の朔日とゝゟ、和の諺ゟ季子の子を乙子と称ゝゟ、もゝ又初の子を太郎子と称ゝ、故歳の初の月を太郎月とゝゟ、歳の末の月と乙子の月とゟ、故ゟ乙子の朔日とゝゟ、又此日餅とらゝゟこれを弁子の餅とらゝゟ、江戸の俗ゝゟと川浸餅とらゝゟ、俗傳ゟらまを食ハゝ水難ゟとゝ

大神祭

上卯 此祭一年ゟ両度あり、夏のゝの部ゟ注を、

御佛名

十九日ゟ

被綿

柏梨の勧盃 廿一日迄

仁寿殿の御本尊とうつして、御帳の中ゟりけて、南の額の間又南北ゟ机とゝゝて、仏像塔形とゆく、佛前ゟ香華と備ふ、雨ゟ地獄変相の御屏風ゝろ、〇被綿ハ御仏名の時、導師並ゟ衆僧ゟ被け賜ゟる綿あるもの、江次第ゟゝろ、〇柏梨の勧盃 江次第 裏書云 柏梨の勧盃ハむり府の中将和氣の某摂津国柏

梨の荘を以て左近府に寄せその地利を以て官人以下酒醪の料に宛ッ云々是も御仏名の時のこと、

おにやらひ 追儺といふ この部五条天神の部に見べし、

蒼朮買 参の條に出せり、

大原雑喉寝 山城国愛宕郡於波羅ハ矢脊の北にあり、[名勝志]大原村雑喉寝ハ江蛇井手村の大淵といふ池に蛇ありて、とりく里に出て人とならんとて、そのあく時ハ晝夜をわかず男女一所にあつまり臥してゐること、大原の雑喉寝と云その夜男女かくらひをなすこと、これハその起りをとく、大原物語といふ古き草子に見えたり、その後産沙神の拝殿に節分の夜男女参籠して通夜するあり、江文明神の社ハ大原の西南、山下平林の中にあり、祭る神倉稲魂命

岡見 逆さ蓑 [温古実録] 大晦日の夜高き岡に昇りて蓑を倒に着て遥に我家をみれバ明年あるべき吉凶の事見ゆるとぞ、[堀川百首]こ とごまのみぞむつきにとるとて木をなんちかふらり年をこえそうか 俊頼 ○こしかへハ明年の吉相を云とぞ

王子の狐火 江戸近郷王子村稲荷の社辺に装束榎といふ榎あり、毎年十二月晦日の夜半この木の下にて群狐火をともすなり、その狐火を以て農民明年の豊凶をトす、今夜社内へ参籠多し、[続虚栗]年一夜王子の狐見にゆかん 素堂

大歳 五雑俎及ひ代酔篇に元日をば歳と名く、これに対して大歳といふか、

大晦日 [紀事]此日良賤つぐみ鳥を焼て食ふにて、こころハ身を継の意に取てつぐみと祝ふ、長間と称を是長久の意に取、貧を取の家かし鳥を食ふにて、こころハ金銀他人に借て其利をとらんと欲するなり、

わ

[兼三冬物] 綿

綿入、綿打、攪車、綿摘 [莚綿 肱綿 東綿 唐綿]

其実を核去るを繰といふ、弓弦にかけてこれを打を綿打といふ、紡車を以て絲をとるを紡といふ、その外肱綿、莚綿、東綿ホハ作る所の状を以てこれをいふ、唐綿ハ古終 俗云木綿なり、[貞享式]古抄に綿の事

冬 を わ

ハ分明あらざ、或ハ真綿もまざく冬ふるとい
ふまでぶるハ附合の害あらん綿ハかるより雑ゝて、
綿入ハ綿抜の對あるまバ入字と添て冬と定むべし、
綿打と秋といふまで、綿をバ摘るひ棉とバ打るふ打
ハ木棉かりて來て冬と定むべし、**綿帽子** 京都の
新綿掬取の外ハ秋ふかふあらざ、
被と用て其面を蔽ふまでふ及ざる輩、夏ハ羅の帽
子を用ひ冬ハ綿の帽子を用ふ唯青樓妓婦の輩のみ
ことと用ひざ、故ふ京師の人
面と蔽ハざるものといゆゝとを、**綿衣** 綿と以て常の
と製ゝ所々ふ絹とくゝくゝく、老ゝ
者寒を凛ぐの服とを、長短心ふ從ふ、**輪炭** 其炭の
薄くくれを切る狀車の輪
ゝごとゝくれと輪炭とふ、

十二月 **私大** 奥州南部

の人、十二月小の月あれバ翌朝日
と以て晦日とも、故ふ私本ゝごとゝ

送 一日

神の留守、神の旅、神迎 此月諸神

出雲國大社ふ集ゝとまゐ、男女の縁を結びあふと
いふより、神送と神の留守神迎ホの事あり、**榛葛** 神
迎水ロゝろ
馬め鈴珍碩 **神集、神在** との部大社神ゝ川
事の条ふ出ッ

音の時雨 川音とあれふ
聞ゆるゝ、**寒菊** 大和本草冬
菊と寒菊と
いふ寒菊ハ京師花より其巣
照ゝく紅とふる、茶人別て愛ゝ、**寒梅** ふの部冬の
梅の条ふ注ゝ、

歸花 冬月諸木或ハ草の花ひらくるあり、
ゝとと帰花とふ、正花ふるるあり、**菫**
瓜 冬瓜くとの
部ゝるべし、**枯尾花** 貞享式此名ハ古今ふ
論ありて秋とあらひ冬
ともいへまど、枯の字と
結びてハ冬と定むべし、

兼三冬物かごびら

雪 ひら雪 霰文云夏衣ふうけゝ薄さ雪とかゝ
ひら雪といふやト云ゝ此説あるゝ 天
子集 佐保路あるゝひら雪やあらざゝし 九重と
ゝひら雪の一重ゝ山姫ゝゝひら雪とうきゝれ

玉海集 おのつから帷子雪や花衣 こハ男文字あそ書こゝろハ證とするふ足まり 俳諧歳時記 こゝろびらを片葩 あるくへとみつるハいくへ猶尋めぐし、〇さゝら雪 毳文云ゝゝひら雪と略してさゝらゆや〇一説ニ藁葉の葉ふ似さる故の名ゝや〇青藍云 猿蓑集 附句 鴛の音ふさゝら雪降」此句詞勢と按ゝゝふ漢文の古訓ゝ里俗うぐきとりふさて一尺二三寸、山竹とおりて作る、鼻ハ反して云、ジヤカラとりふ木の枝ゝて作る、鼻ハ反して云、ジヤカラとりふ蔓又ハカツラとりふ蔓とも用ふ山漆の肉付の皮ゝて巻ゝとむ、是ハ前ゝ畳しゝる沓の下ふそくものゝり、雪ふゝこまざるゝふまりまでるハ竪二尺五六寸より三尺餘、横一尺二三寸、山竹とおりて作る、かゝきハそぐりの二ツハ冬雪のやゝゝゝふる時、踏こまる為ゝ用ふきつけぬ人ハ一足もあやゝゝしあれる者ハこれとをき、夜ふ鐘の声のさえゝゝて獣と追ふゝ、鐘氷 寒夜ふ鐘の声のさえゝゝて獣と追ふゝ、鐘

さゆる 霜夜あどふ鐘の音の一入さえてきこゆるをゝふ、紙衣、紙衾 雍州府志 紙子、俚俗白く厚き紙二つ重ぎ、柿渋とぬり、日ふ乾ゝて數遍晴る宵露宿ゝるときハ色と発を、両手ふ揉ゝ和らげ、衣服ゝ製を、是と紙子と称を、寒気ゝ禦ぐゝゝむ、中古洛東清水坂の人是ゝ製ゝこゝを清水紙子とのゝ、又素紙子とのゝふ又紀州根来の土人白紙ゝ以て柿渋ゝ塗らゝゝしてこゝゝ製ゝ白紙子とのゝふ是女子の手ゝ經ぞゝて成る故ふ、持律及び南都東大寺、二月堂修法の僧徒ゝゝゝ着る、好事の者ゝゝこれゝ着る〇紙子賣 夕紅 元禄十年刻 仙臺の浄瑠璃きう紙子賣」此外紙子賣の句多し 滑稽雑談 野郎遊女も着ゝと云ゝ元禄年中ふハ流行せしゝゝゝ 和漢三才圖会 九七月のゝしめえとり 紙衾 ふの部衾の条ふ出ッ、蕪蓍 種るゝの根葉とゝふゝゝ、これハ茎の屈ひ、其根長くゝて白し、茎粗く葉大ゝくしゝて厚く濶し、夏の

初め薹を起し、黄花をひらく、四出芥のごとく、角を結ぶこと亦芥の如し、其子均して円し、芥子ふ似て紫赤色ニ

雉の花 牡ハ花さき牝ハ花さかず、秋の部ふ注す、

枯蘆 芦既ふ成長して四五尺より丈ぞろふ至て其葉老衰して纖く、莖筒白色を帯びて竹ふ似そうこゑを枯芦とよくふ、

枯柳 葉尽く黄落せしを枯柳とよふ、

枯野 千草の枯まそる野をよふ、露を結びてとこかしこ、

鳥 條目 雁鳥の異名ニ百山と越ても帰るニこ鳥雲のそらりこ冬ニ、

狩 鳥獣ふ限らず凡て尋求るを狩と云、但し多ふ出せるハ專ら雁鳥狩とそくふ、

狩場の雉 注ふ田犬不及、

狩杖 と引べし、

狩場 古事記 獵庭 雁鳥三百羽 狩杖ふハもの〳〵杖をのふ犬といましむる杖ニ、

櫻の木を用ふるあり、杖の長さハ其人の長さふ切ものニ、

鴨鷹 日本せと 鴨を取る狩をのふそ、

鳧 格物論 鳧ハ野鴨ニ、江海沙上ふ在て

沙石を食ふ、貝蛤を食ひて消化をまで糞ふ随て出づ、

凡鳧ハ雁より後ふ来り、春ハ雁より後ふ帰る、〇あぢむら、

天木 とぞそむる氷といふはなるらん、あぢむらの諏訪の入海西行 鵜鶘のむらがるをよふり、〇

鈴鴨 向合 鈴鴨の声ふりこてて月寒し 嵐雪 〇

かべ刀鴨 と云一種ニ又尾長鴨ともいふ味美ニ虚を補ふ、〇あのさ、小鳧ふ似て同じ〳〵ぞ、〇どう長、アイサ真鳧より大ニ首黒し、〇みこあさ、もりのり、あうも、鷺鳧、緑あり、魚と食を味よろぞ、〇

頭赤頭 ようふく、嶌ニ、真鳧、此外種類多し枚挙ふ遑あらず、〇水翁、鴨のりこと増山井ふ出せり 急就章

鳧 頸の上の毛ニ云ふ故ふ水藻を得ニ喜悦ぶ注ふ鳧公羽ハ水翁といふ尋めざし、

鴛鴦 鳧の俗称ニしふ

石花 の部ふるづニ、

蕪頌曰今海旁皆ニあり、尤多ニし、石ふ附て生ぞ、礪礪相連つらく房の如し、呼て蛎房とそ、晋安の人呼く蠔苗とす、初生止石の如し、四面漸く長し、二丈ふ至る者転巖ニして山の如し、俗蠔山とよふ、一房の内

肉一塊あり大房ハ馬の蹄の如し、小なるハ人の指の
面の如し、潮の来る毎に諸房皆開く小虫入るとき
ハこれを合し、腹に充しむ、○時珍曰牡蛎蛤蚌の属
皆胎生卵生あり、独化生純雄にして雌なし故に牡
の名を得たり蛎とらひ蠔とらふ其粗大となふ、
○石花の字ハ文選江ノ賦に見えたり、

十月

春日祭 十四日、此祭一年に両度
あり春の部に洋し、狩の使 この部五節の条に
出

賀茂臨時祭 下酉 [公事根源]宇多天皇いまだ
王侍従と申奉りしとき、
狩しられけるに賀茂大明神出現ましまして臨時の
祭をたまふべきよし約しおはしますことのありて寛平元年十一
月より、臨時の祭 神樂 庭火 [公事根元]太々神
を奉らせるゆゑに、 あぢめ 楽のおこりハ天照大
神の天の岩戸をさしてこもりおはしまし時、諸神のいのり
申させたまふに天鈿女命真辟葛を蘰として日蔭を
手繦にしてうたひ舞、庭火をさきしいはくよりはじまる
事、我朝の風俗神代にてあるべきや○阿知女 [梁塵]

[抄]阿知女作法 本 阿知女於於於於 末 阿知女於於於於 ○一条
禅閤御説あちめの作法慥成所見なし、但鈿女をあちめ
といふにや、おとうと相通る之、天鈿命の岩戸の前にて
俳優をなし侍るを今の世にあぢめの作法といふにや、
おおおハ笑を含声なり、日本紀にハアナと笑声をなす、
アナ、又五音通るなり、○東三条の御神樂、[兵範
記]云仁平二年十一月十七日丁未、東三条の御神楽行ハ
る云云 [拾芥抄]東三條の第ハ四條院誕生の所或ハ重
明親王の家云々、神樂歌
千歳、早哥、吉々利々、星、得銭
子、木綿作、晝目、弓立、朝倉、
其駒、竈殿哥、酒殿哥、此ホ 神遊ひ哥 採物哥
ミな神楽のうたひものなり、 大前張
小前張 或説に大嘗会の時近江の坂田郡より老翁
の参りて稲を舂く、その時「あさくらしき年の
ちとせふくしことを千とせとうたひてたのしきをつめとなふ
哥をうたふなり、此哥古今集にもミえたり、あさくらしき年
の始にかくしこそ、如此こそ、たのしきを
つめとハ楽とつくりをさめるべし、○舞の哥、ちはやふる

き山ふる雪のまふく時ふくおも四ゆるれ」をかへ
葛城山例の枕詞ふり○採物哥、榊、幣、杖、篠、弓、
劔、鉾、庁折、諸畧葛、以上手ふ採物ゆゑ採物哥と
いふ○大前張、宮人、木綿、志天、難波潟、前張、階香
取、井奈野、脱母古、○小前張、蕗、蕗枕、闘野、銭等、篠波
殖槻、總角、大宮、湊田、蕎、以上神楽哥、いづれも本末
あり、皆冬季
をかねふり、

韓神謡

梁塵秘抄 宮内省ふまつりを
韓神二座を申ふるし○本
みーまゆみかふとうけかれらかれらをきせんや、
からをき、末八ゐらそと手ふろかもてふれらかとのう
らをきもん

髪置、帔初

紀事 此月吉日
や、うらをき、
袴著
帯解
と撰まれ、院中三
才の諸王子御髪上御色直し、五才の宮方御深曽義
著袴、九歳の御方御紐直し等、所謂地下の髪置袴
著帯解是ふ○帔初八五歳或八七歳の女子ふ、初めて
帔衣と蒙らしむるとふあり、

滑稽雑談 九綿帽子の
尺ふるを児ふうふう、是を白髪綿と称して、其寿ふ
らんとを祝もるものふ、その綿の置ふる半を金箔

とりて彩ふる太き元結みて結ふるとを童頭髪と云、
又数柑子とりふ赤き実とその髪ふ結付るもあり、未
廣扇と児ふ持しめ、吉日とそらふ
産沙神の社へ詣づるまり 五云

歌舞妓足揃、顔見

連見 假婦伎の名ハ
文献通考ふ
うそとり、今の俗哥舞妓ふ作ふ、十一月朔日京江戸
大坂芝居顔見ふこの顔見とらふとふ、三代目中村勘
三郎工夫とりてこれとそ、むとの又大坂ふ夜芝
居ふまをとハ宝永のころ、嵐三右エ門とらふ戯子小夜
嵐とらふ狂言甚ふ繁昌ふて見物夜中より群集し、
後ふハ初夜とり来りるゆふこれを嘉例ふふ、顔
見ふハ夜芝居興行ふそふん、凡俳優一年の座組、この狂
言ふ定む、故ふ顔見面見の称わり又晦日の夜茶店の
軒ふ種々の造り物と出てこれと顔見の飾物とらふ、或
ハ具ふ負の花毛とり、酒樽、醤油、或ハ炭の類、何られもふ
山の如ふ積あげ、大ふ札と出し、進上某丈の文字を書、
これと積物とらふこれらを見物せんとて、諸人群集もる

こと更おらふべうぐ、凡能優家十一月朔日と以、相祝ふ〳〵元日のごとしおりて芝居の正月と云、

杜父魚 山海名産圖会 越前の霞魚ハ此国の外ふちう〳〵にく杜父魚ふ充るい誤ことぞ霞散のふる時ハ腹と上めて流るゝ〳〵とふ一名とかくふちうにて人声あり是杜父魚の種類あり、杜父といひて誤ふをあらざるふ、続猿蓑 かく

寒苦鳥 五雑俎 五臺山ふ出あり、状ち小雞の如くにて四足肉の翅あり、夏月毛羽五色其鳴ことに鳳凰我〻もろ〳〵ふぶこと〳〵冬ふ至毛落て鳥の雛のごとく、寒ことを忍て號く、得過且過とふ其糞鐵の如く、状ち凝脂のごとく、恒ふ一処ふ集る、醫家これを五霊脂とふ是こ 佛経 印度大雪山ふ鳥あり此鳥夜寒ことに苦て鳴声寒苦身を責む、夜明けバ巣を作らん明てハまた今日死もることをふ〳〵ぞ、亦明日ことをふ〳〵ぞ、何ぞ故ふ巣を造ことて無常身を安穏ふせざる、 玉葉 あるひく雪の深山ふふく鳥のもろふかどろ〳〵人のふきうふ後京極

十二月 被綿、栢

梨勘盃 雞乳 礼月令 鵲始巣

との部卿仏名の条ニ注ス、

此記ニ五月之候、五月十二月也、雞乳同上ニ大寒之候、十二月中也、〇一説云、十二月始めて巣くふ戸開ふ太歳ふ背き、太乙ふ向ふ来歳凡多きことふ〳〵巣ふふ〳〵ぞ皇下も故ふ曰鵲未を知り猩々徃と知る、〇鵲の形状ハ、烏ふ似て小ふ、尾長し、〇乾鮭 乾〻製しさる鮭〻も寒の内芭蕉

かふ拂 滑稽雑談

僧尼山伏の輩ふ金銀米銭を供養〻施行もることを、俗ふかふ拂へとふ具ふハ加持ふべ〻、今年無支ふ送つて来年と待えく又年と加ふべき祈禱ふ其身の当年ともらふまじ〻、

竈公祀 五雑俎

二月二十四日竈と祀る、謂らく竈神この夜天ふ上つて一家の善悪と以て天ふ奏ことぞ是日婦人女子弁と持ス云く俗猶これを竈公とふ、萬畢術ふ云竈神晦日天ふ帰つて人の罪過と白もの、 酉陽雑俎 竈神六女あり、常ふ月の晦と以て天

お上下人の罪を白も大るものハ紀と奪ひ小まるもの
算を奪ふ〇我俗十二月下旬修験を招きて竈神を祭
る、これを竈夜又竈産連
とう〳〵五月九月又あれし、**寒の入** 大寒小寒此両日
越の俗是と 小豆餅と食ひ地
寒固と〳〵、**寒念佛** 滑稽雑談傳へ聞くハ往
舎にて僧俗を限らず寒三十日暁天より及びて山野ふ
出高声に念仏と唱へ〳〵近年宝永
より及びて京の在俗男女老若を隔てず、五三昧
廻ることく、寒夜より鉦をうちて行粧喧しく、**寒**
垢離 修験の徒寒中道路並橋の上ふ立て水を
あび銭をこふもあり、是を寒垢離と〳〵是寒
中の水 **寒聲** 哥曲を遊ぶ者、寒中朝暮大
行あり、或ハ寒、声を発もこれと寒声つとう〳〵、
習と云、**寒造の酒、寒曝** 時珍曰酒ハ臘月
年を経て壊ざるごとし老酒とう〳〵 紀事 背
寒中新き井の水を汲ミ、掃或ハ壺ふ盛てこもを収め

冬かよた

富ハこれと寒水とのへ五穀及び諸菓生姜ホの物を
漬て後陰乾あるてこれと寒ざらしといふ、
寒の雨 寒中の雨をう〳〵鳥
羽の田づら や寒の雨 芭蕉 **寒の月**
や居合をとる 荷兮 **寒の内** 浪化
葭ぶきの ら猫のこゑもつれ
もや寒の内 門
松營 銃松實 紀事 山人稚松翠竹を賣松ハ
銃竹實 子の日の松と称し竹ハ銃竹と云、**寒**
竹の子 この部孟宗竹
の条ふ注を、 **掛乞** 貞享式 掛乞
とふ冬ことさぐる
ことと今の例よう〳〵秋の
うふもつれぬ〳〵、

よ

兼三冬物夜興

引 さくせき 冬の夜山中獣を獵る小犬と引やるよ、
猟師のことくふヨコ引とかし獵の内ふも狸狩を
ふ **十一月** **吉田祭** 此祭一年両度あり、
夏のよの部ふ注を、 **十一月**
吉田大祓 節分 紀事 節分の夜、卜部家吉田の
齋場の内陣ふて清祓と修を神

人一人これよ従ふその式正月十九日の夜の行法よ同じ、節分の朝ト部家宗源殿小於て、神道護摩を修そ、疫神齋札三千枚と出、諸人求うて門戸お貼そり、

た

十月 燧爐

舍 ろの部 炉閧 **達磨忌** 音 紀事 梁の大道二年十月五日入寂大の条お出ス、 元亨釈書 達磨者南印度小の禅刹悉くこれと修そ、香至王第三の子ス、蕭梁普光元年庚子支那よ来り、武帝のもふ茅一義と説、帝契ゑそ、乃ち江と渡ゝ魏ふ入高山の少林寺ふ居、九白九年と経て天竺ふ帰る、 兼

三冬物

玉の塵 玉の屑同じ、雪とふふそ、 たびら雪 帷子雪の条よ 帷子 汪ス、 炭團 注不及、 湯婆 和漢三才畨会 大年保唐音欸、按よ湯婆銅どスてこれと作る、大さ枕の如くゐて小き口あり、湯と盛裨の傍お置て腰脚と煖む、因て婆の名と得ゑり、竹夫人と此と、寒、暑懸隔の重器ゑそ、○黄山谷湯婆詩云、小堀

暖足 **足袋** 華さび 和漢三才畨会 單皮、足袋俗踏臥 皮俗字 半靴、和名多比、今野人鹿の皮と以て半靴とそ、名づけゑ多比とふ、單皮の二字と用ふべゝ、凡冬ハ皮と用ひ、夏ハ綿をもちふ、

大根引 集解 六月種と下し秋苗ととり冬堀春の初角と結ふ 貞享式 大根引此詞ハ冬の當用ゐり大根と畧ゑそ音語よゑびゑ、京家の字ねり故ふべゝ、

刀鳥 うの部鳥の条ニ注ス、 **鷹** 時珍曰鷹鶻撃と以そ、故ふれそ鷹とふ、其頂よ毛角ゐり故よ角鷹とふ、其性猛爽故よ鵰鳩とふ、

大和本草 鷹の類三種あり、鷂の類、鷲の類、鸇の類ゑ、 和漢三才畨会 鷹の尾十二枚長サ五六寸、ふく合て末ハ円く、黒白の重紋あり、天寒ゑあふときハ尾と畳むと一枚のごくそ、尾損傷よ遇ときハ漆樹の汁と取て、他の鷹鳥の尾と接、尾の下よ三品の毛あり、尾末毛とふ、乱糸、挟衣下の尾と石打とふ、尾の端の白き者を約華とふ、背の毛と母衣毛とふ、其服よ出る白

毛と茅花とつく、喘の脇の毛と歯黒付とつく、肘の内の毛を水掻毛とつく、脚は韋縹と著る処を無毛脛とつふ共よ皆俗称あり、○雀鷂、兄鷂、鵲鷂、鵟、隼、角鷹、サシバ等の種類あり、各頭字の部に分ち注す

鷹狩、鷹匠

追鳥狩　鳥叫　偸起鳥　立慕　列卒　落草　鳥立巣

繩　狩杖　狩場　呼声

○本朝ふく鷹を肘よそふるハ百済の酒の公より始まり、仁徳帝の四十三年秋九月、阿渾古異鳥を献ぞ百済の酒公をしてこれと養しむ、酒公韋縹と以て其足につけ、小鈴を以て其尾よ著て腕の上よ居そまと献ぞ、始て鷹飼部を定ぬ又酒公鷹と居て帝の狩ふ奉従て以て雉と鷙、其後兵部省よ鷹司あり、後冷泉院帝の時、出羽の國司源齊頼これと飼ふと故つ、最も神妙を得ぞ、○追鳥狩ハ雉子狩ふ列卒と以て趁子と追出そとる、あり、又田野よ群居る諸鳥の追鳥狩もあるべし、○鳥叫

秋枝折　鳥をけひとハそれそれる鷹をよぶとふ云ふ、又狩人の声と立て鳥を追ふるをもいふぞ、○

偸起鳥ハぬきそこそあり、鷹狩よおそれて草をどふくふる鳥のひそふおそふ又ぬきそこそ鳥雇るふあひて草のつけとふ、○教草　落草　漂塩草　とく（草と、ハ鳥ある処をそこそあり、古鷹の鳥と追落しる所を落草とつく、その落草の上を羽を引て知らそるとつく、○力草　漂塩草　鳥と草ふ追ひおとして鳥をとらんぞて鳥の落草と取を草ととつくとつく、昼力草あるべしちら草とハ、鷹、鳥ととらへ先立て草をつくこ飛ぬくせぬく、○鳥立と巣ふとハ鳥の立をとらさひて狩人の行をつく、○列卒縄　漂塩草　鹿狩ふ縄と引て鹿と追出すととつく、鷹匠の士おと列卒入事勿論あり、その外ふもあるべし、鷹書　鷹のの卒の如くつくつと列卒とつく、○呼声ハ鷹ととよぶ声ちあり、鷹の鈴　鈴着ふうハ鈴杖とそちひさき金をて杖と造ふ、尾毬おつけくそこの上ふ鈴のあそうて鳴ふり、惣じて鈴師並よ鈴の付ふ口傳、鷹朔赤　梨布　鷹を二百首抄　梨ハ木と用ふそう、春ハ梅、夏ハ擲、秋ハ檜、冬ハ松、外

格ハ野山ゐて結ふらく一切立木の枝のあるゐそ外樂
ハあらぬもの〻枝ゐそ羽をつくものゝ又樂布ハ樂垂と
もいふ垂布ふ似ふう、そうたまき 和名抄 韜 和名太加
家の紋あどを染るゝ、鷹韜 衣也 鷹三百首抄 公方
家ふおがけを 同上 鷹ふおふりとハ鞭ふう長き
手きとのふう、鷹摇 あのあう、夜居の時鷹ふおふり
て寐うせぬ道具ゝ當時 鷹の藥
ハ鞭ゐそのまゝ用ふるゝ、 柳の露 切垂の
水 夜取水 恩
沢水 條吹 鷹 鷹經驗方 柳の木
錦の帽子 鳥の卵のゆくゝて斑文あり、其虫と取て
水ゐ掛て食ゐ和しうれと飼ふふ神功あうとふ〇切
垂の水、柳の露 糸基房卿鷹飼連哥抄 切づいの水と
ハ鷹の葉あり、桑の枩の切口ふさあうこう水ふり、柳
の露、これも葉の水あうと、〇一説ふ夜取水、恩沢水、意
慕水あどゝハ皆女の經水のことあり、〇條吹 鷹三百首
抄 篠吹と、青竹とぬるめて切口ふりいる意氣ふゝく、
鷹の羽のぬゝとるゝと直ゐをゝくふ〇錦の帽子 同上
錦の帽子とハいふも色あき紅葉と取てそ鷹の

虱ゐ洗ふ、
といふあり、鷹の經緒さゝ 鷹書 經緒さゝそとハ
付るとあり、經緒ハ鵠
より小き鷹よあり、大鷹ふそをき繩とゝく、
四十尋の繩あり、九經緒ハ二十ひろあり、鷹の
餌袋 鷹三百首抄 水餌とハ洗ひ餌のことあり、さゝ餌とい架ふ餌
とゝふも洗ひ餌のことあり、さゝ餌とい架ふ餌
をゝくり付てゝくゝ
飼ふとのふ、 鷹犬 打餌 犬ふ三品あり、田犬とのふ
田犬則鷹犬之、〇打餌 鷹三百首抄 打餌とハ犬の食
物あり、犬ふ野山ゐて飯ふ糠とまぜて餅の如くして、
鳥と立るゝ 竹篦 深き江の底ふ沈め
特飼ふあり、 て魚と取具あり、その形ち丸き
小篭あて口ふうゝりあり、沈むときハ口開き、引上る
時ハ閉、是ふ餌と入て、湖底ふ沈めおきて雜魚蝦と
取、尤冬月多ゝ、湖西堅田の漁船一艘ふ竹篦數百で
積、沖ふ漕連出てゝ〻と沈む、漁人の産し竿環ふ筌
字と用ふ非ゝ、筌ハ以へといふものゝそ流川ふ
ふせて魚と取るゝ具ありつゞとハ大ふ違ゆゝ、 短日

月令廣義 漏刻 盈四十一刻夜五十九刻 杜詩 寒日經暮短、大和本草 大口魚ハ北土の海ふ多し、南海ふハ生せず、西州ふハ北海ふも生せず、朝鮮ふ甚多し、寒国ふ生ず、冬春多く捕る 和漢三才図会 夏月全くふとし、故ふ俗鱈字ふ作る、味鮮魚ハ佳ものにて、臓とりて甚佳し、ことと塩鱈といふ、其鰓煮て食ふべし、或ハ酢ふ浸し食ふもまた佳り、○雲鯛 呑魚の鯛ふ雲鯛菊鯛ともふ形色を以て名づく、雞卵酒 寒気を禦ぐふ飲之依て季ことを、

十一月

當麻祭 十四日 ○一年ふ両度あり、夏のたの部ふ

中寅、○吉田八幡の祭ふ、公事根源 この祭ハ人の魂魄の離遊するを招きそ、身中ふ鎮るの奇特あり、宇摩志麻命よりて起るとぞ、

大師講 智恵の粥 智者大師の忌日ふ、廿一日

より廿四日ふ至る、諸山大師講と修もて、比叡、東叡日光の三山、廿一日より廿三日ふ至るまで昼夜法問あり、三邑と論議ふより、一山一院づゝ会場を動し、それと天台宗とより、俗もまた大師講と修し、各赤小豆粥をそゝ、枯栄と折て智恵の粥とより、仏祖通載 天台智者禅師、開皇十七年十一月廿四日ふ寂ふ、大師諱ハ智顗、字ハ徳安、潁川の人 畧

澤庵漬製 九十一月中旬より大根の澤菴漬と製ふ、○青蘐云 沢庵和尚そゞめてそれと製故ふ名くと、ふより、愚按ふるふ沢庵和尚の墓所武江品川東海寺ふあり、無縫塔ふて丸き石を置の上ふ大根漬の壓ふ丸き石と置さるゝゆゑ、沢庵和尚の墓所の形とよく似るふ故ふ俗沢庵漬といふ欤、

十二月

大徳寺 開山忌 廿二日 大徳寺ハ、山城国葛野郡紫野ふあり、今日開山大燈国師の忌日ふ、

和漢禅刹次第 大燈国師行状云、師諱ハ妙超、宗峯ハ其号あり、播州揖西縣ふ生る、紀氏の子、父母観音大士ふ請て誕生る、十一歳の時同国書写山戒信律師と師とる、成長して不立文字の宗風をもとふ中畧建

武二年十二月廿二日逝去と云

宝船敷

【紀事】節分の夜画船を白紙に貼け諸臣に賜ふ、地下良賤も画船を衾の底に布て寝る、今夜吉夢あるときハ来歳福を得られ、悪夢を見るときハ翌朝これを流水に付て悪夢を流すとかや、和俗この船の内に種々の珍宝を画くがゆゑに宝船と称す、近世これを梓に鏤て児童市中に賣る【居家必用】船に乗日月入と夢る時ハ吉、船を渡ると夢るときハ大富貴を主るとぞ〇今の俗正月二日の夜に宝船を布ハ元禄年間より遥に後のならハしなるべし、

鯛味噌

鯛味噌ハ肉味噌と同じく、酒と以て煮熟して食之、

【れろ】【十月】

袖の時雨

涙の雨なども同じく、涙にて袖のぬるゝをいふにや

蕎麦

新蕎麦を秋とし、荊と冬ともに

荊

早梅

范至能梅譜云冬至前已開故得早名要非風土之正

【兼三冬物】

雪車

【北越雪譜】そもそも此轜といふ物雪國第一の用具なり人力を助ること船と車に同じ、且作ることいと易きハ圖をもてしるべし、形ち輪なき地車の如し大小定りなく載る物にしたがひて造る木材ハ堅木を用ふ、我国の雪冬ハ凍らざるゆゑ冬ハ轜とつかへバ雪に落入て擿事なりがたし、轜ハ春の雪鉄石のごとく凍りたる正二三月の間に用ふべきものなり其時にいたるを里俗轜道になりしといふ、俳諧の季寄に雪車を冬とせしハ誤れるなれバとて雪中の物なれバ春の季にハ似気なし、古哥に多く冬によめり、実にさぶれども冬として可なりと云々 山中樵るところ乃薪を雪車に積て引帰る或ハ山に曲りあるハ件の如くに縛しかる薪の轜に乗危足を遊ぎしてこれにて揖とる、船を走らするがごとし、此術学ばずして自然に得るところなり、轜を引にいかにするも哥を謡ふなれと雪車哥といふ、則樵哥なり、漸くその家にちかくなるときハその妻子など哥を聞て夫の帰れるを知て、出迎へたすけつゝ家に至らしむ〇青藍云俳諧歳時記に近来雪車の句作あるところ多くハ雪車に乗といへ、雪車ハ薪を積のミ人の乗ものにハあらずと云ひつたへされども

【堀川後百首】それとゆきふりふけらしなわらち山越の
さびし人雪車に乗まで【曠野集】夜ところて雪舟に乗
ころよありうお、此外先吟あまたあれバ
たとへ實事にあらずとも、らしからバ、**蕎麦湯**
【本朝食鑑】蕎麪を用て熱湯に撒し、拌匀徐とこれ
と飲めバ、寒を禦といふ、然れども蕎性寒、寒を禦ぐ
の理なし、惟熱湯身
を煖むる故ならん、 **【十一月】園韓両神祭**
中の丑○一年に両度あり、春
のその部をみるべし、

つ

【十月】大蕗の花 俗よつハぶきといふ、【本草綱目】欵冬花の條
下に云一名橐吾【大和本草】莖葉欵冬に似
たり、一名山吹といふ世俗は庭中に植て玩ぶ秋黄花を
ひらく、冬ハ其実房となりて數の顆あり、フキよりも
葉厚くして光あり、冬も莖葉ありて枯まで、その莖を
食ぞるに味フキの如し、皮を去てフキの如くなべし、こ
れを欵冬といふ人あり、誤なり、今按るに急就章に橐
吾欵冬ハ似て腹に糸あり、陸地に生ズ、花黄色とあり、

是つて
あるべし、【兼三冬物】**つらゝ** 垂氷 文人介我云
つらゝハつらゝくのつまり、つらゝハ氷のたてる形容なりと【尾張の家産】
かさなえて氷る形容といふ、【源氏末摘花】朝日さす
軒のたるひハとけながらなどかつらゝのむすぼゝるらん、此
外證哥多し、たるひハ落る雫のまゝ氷りたるをいふ、俗
つらゝといふもの是なり、【新古今】立ぬるゝ山のしづくも音
たえて槙の下葉にたるひしあるり此哥どもまで垂氷也、
さるをつらゝとおもひのけずるゝ、古人も句作せらるゝハ、
俗談平話にもてさぐる故なれバ強て改むべきにもあらまそ
○銀竹 垂氷の異名と
いへり、きの部をみるべし、 **綱貫** 【滑稽雜談】當世
平賤者のはく綱
ぬきと称するものハ、往古らちなものの遺風を轉じく
牛の皮を以てこれを造て、履底に鐵を以て釘せ物、
云、今雪沓といふもの是なり、【炭俵】
付綱貫のいぶの痕あり雪の上

頭巾 袖頭巾 御高祖頭巾 きまつ頭巾 きとく頭巾 丸頭巾 すみ頭巾

きまつ頭巾、きどく頭巾、二名一物なり、畐骨

董集ふ云ゝ、今つゝみ之訛頭巾ふ似ゝり、五元集日
ぢりときまくづきんのうき世かな、其角 用捨箱 袖頭
巾一名御高祖頭巾とふ物、ふるき草紙ゝを見ゝぞ、
宝暦八年の写本愚痴拾遺物語ふ、一両年以前より
さゝらきづきんとある、袖頭巾とふ其原ハ順光とふ
坊主、品川へ通ふ高祖日蓮上人のうぶり物より思ひ
つきしゝ、〇九頭巾ハ今の大黒頭巾
のごとくふるゝべし、もと頭巾未考、

露氷 とひ

氷る

て冬、

つもたき

苧環ふ凍

の字を用ふ、

雀鷏 和名をゝら

悦哉雀鷏ハ鷏の 鷹ゝ或ハつゝ

属雀鷏の雄あり、

月の氷 御傘 冬、ちりたゞさ

ふわゝゞ但し氷ふ移りたる月の句体ふゝゞ水卫ふる
べし、新撰六帖 いとゞさゆるよゝらゝらとしの寒ゝめれゞ水
あさ空も氷 つきさゆる
る月影冬 **月冴** ひて冬あり、

十二月月次

祭 十一日〇一年ふ両度あり、つ
良のつの部ふべし、

追儺 鬼やらひ 周礼 方相氏

八黄金の四目あり、玄衣朱裳戈を執り楯を揚百隷
と叫ぶ時ふ儺ひも、五雑俎 儺ハ以て疫と駆ゝ古人最
ゝ鬼と重んぜ、漢より唐ふ至つて、宮禁中ゝふゝ鬼
と行ふ、護童倭子千餘人ふ至る、王建が詩ふ云ゝ金
吾除夜進儺名、畫袴朱衣四隊行、これ今即民間
この戯あり、但重鍾馗と燃爆竹とのゝ、公事根源 大
舎人寮鬼を勤め陰陽師祭文とりて、南殿の辺ゝ
着てこゝと讀む、上卿以下これを追ふ殿上人御殿の
方ふ立、桃の弓ゝ蘆の矢ふてこゝを射る、〇儺ハ 江次第
裏書 儺と行ふハ晦日ふ前ゝつゝ二日、公事根元 晦
日 世諺問答 塵嚢抄 ふ節分とあり、按ゝるふ中
華ふも金五日除夜進儺名とあれゞ節分ハ後のこふや、

兼三冬物

葱 ねぎ 根ふう 大和本草 大葱ハ五月
一丈字 ふ實を植ゝ八月九月苗と
分栽う冬ゝ春さうんあり、肥地ふふくうるて、漸々ふ培
バ白根長大云ゝ故ふ根ふうくうるて、漸々ふ培ふふうくうるて、漸々ふ培ふと称ス又曰和名抄ふ、和名
紀と云、紀の一字を名る ねもつ
故ふ一名一文字とのふ、**子祭、子燈心** 大黒天
の祭ゝ、

紀事 九商賈此月子ノ日子ノ時ヨリ子ヲ祭ル蓋賣買ノ間ニ其ノ利ヲ取ト鼠ノ子ノ蕃息ヲ比セント欲スルニ子ヲ供スル所ノ膳食品毎ニ大豆ト加フ又二股大根ト供ス大豆ハ鼠ノ好ム食ニ両股大根ハ俗ニ福来ト称ス○子燈心 和漢三才圖会 毎十一月子ノ日ニ其ノ年ノ據ヲ貯フ

年貢納

滑稽雑談 秋收ヲトリムルハ秋月侍ルノ時ナリ當世多クハ冬月迄ニ皆濟ス人物〳〵一年中貢ルヘキ物ノ數多アレバ勿論ナリ雑ニアラズシテ○青藍云年貢納ト云ヒ及ビ苧環ヲクレト載セヨトイヘドモ炭俵集ニ今ノ間ハ雪ノフルヲトイヘリ前句ハ年貢モンゴトニホロホロト芭蕉又千鳥ナクヒタヒク寒ソウナ前句ハ未進ノ高ノ事ニ非用ヒ芭蕉云〳〵ヅレモ冬季ヨリ冬季ヘツレ〳〵ト子細アリテ冬季ト云ヒ

な 十一月 涙

の時雨

涙ノ雨モ〳〵ト云ヒ

名の草枯る

萩原芒葛

ヲトノカヲ〳〵ト凡ソ〳〵アリ〳〵ヲ云ヒ名ノ草枯ルヽヲ〳〵句作ヲ云ヒ

海鼠 こ

海鼠 金海鼠

和漢三才圖会 按ルニ海鼠ハ中華ノ海中ニ魚ニ非ラズ蟲ニ非ラズ東日本ノ熬海鼠ト見テ未生ノモノト見ヲ故ニ書ニ載スル所ニアラズ旧事紀ニ既ニアリ

兼三冬物生

熬海鼠ハ本朝ニハ神代ヨリ既ニアリ旧事紀ニ云ク彦火瓊々杵尊ノ時諸魚皆仕奉ラントスルニ海鼠ノ口ヲ割ク故ニ今ニ於テ海鼠ノ口ヲ割ク是也中略骨ト云ヒ天ノ鉏賣ノ命細キ小刀ヲ以テ其ノ口ヲ割ク故ニ今ニ於テ海鼠ノ口ヲ割ク是也中略骨ト云ヒ鱗尾鰭ナク皆四ツ足ニテ浅青色又黄ト帯ブル者アリ又黒ト帯ブル者アリ皆虎斑ニ似タルヲ以テ虎児ト名ク全体疣多ク骨ト云ヒ軟ニ其腹扁クシテ白色常ニ水中ニアリテ身ヲ擴テ薄ク扁ク水底ヲ游行ス如シ物ニ觸ルヽトキハ横ニ縮ル水ヲ離ルヽニ至テ半斤ノ胡瓜ノ如シ其口折テ歯牙アリ其小刀ノ痕ノ如シ冬月盛ニ出ヅ春月ノ終ニ尽ク金海鼠ハ奥州金花山ノ海辺ヨリ出金色ヲ帯ブ故ニ金海鼠ト名ツク○

大和本草 生海鼠ノ条云其腸黄ニシテ長シ

醢(ひしほ)を味(あぢはひ)ふるに、鍋焼(なべやき)貝焼(かひやき)皆其食物の調味を温(あたゝ)めふさぐ寒氣を防(ふせ)ぐ

[本朝食鑑]救名納の字未詳

と用ふ是(これ)を納豆汁(なつとうじる)或(あるひ)は納豆(なつとう)汁(じる)と号(なづ)く、納豆は近代僧家多く造(つく)る、故(ゆゑ)に此豆僧家の納所(なつしよ)より出(いづ)ると云て名づくる歟、

十月中

山祭(やまつり)

上卯(かみのう)○一年(いちねん)に両度(りやうど)あり、

夏(なつ)の部(ぶ)に注(ちう)を、

十二月内侍所(ないしどころ)

御神樂(みかぐら)

[公事根元]天子内侍所(ないしどころ)へ行幸(ぎやうかう)して御拝(ごはい)あり、

刀自(とじ)祝詞(のりと)をいふとあり内侍所の前(まへ)に主殿寮(とのもりよう)燭(しよく)を引(ひく)、官人庭火(にはび)をたき、本末の座を二行(ぎやう)に設(まうく)云、[紀事]官人内侍呼(よび)いろうて鈴(すず)を上(あぐ)る是(これ)神樂(かぐら)奏(そう)する義(ぎ)、御供米(おくまい)をのふこと(のふること)を御久米(おくめ)といふ、その人鈴の音を聽(きゝ)て仮(かり)ふ鶏鳴(けいめい)をなして帰(かへ)ることと年(とし)をとるとふ、このごとくするときは来年何方(いづかた)へ向(むか)ひても障礙(さはり)なき世の部節分(ぶせつぶん)の条(でう)も出(いづ)、

長崎の柱餅(ながさきのはしらもち)

肥前国長崎(ひぜんのくにながさき)そこしのそれの餅搗(もちつき)の日(ひ)ふ終(をはり)の一日の餅と家の柱(はしら)へ付(つけ)おき、正月十五日左義長(さぎちやう)の火(ひ)にてそれ(それ)を炙(あぶ)て食(くら)ふときは病(やまひ)なしと柱餅(はしらもち)とくわこの事西鶴(さいかく)が[世間胸算用]にもふ書(かき)ふもらしくり、

雨(あめ)ふらむ

十月村時雨(むらしぐれ)

兼三冬物(かねてみふゆのもの)

六の花(むつのはな)

[栄子詣録]地六ハ水の成数雪ハ水結びて花をあらはす故ふ六出(むつのいで)

[延喜式]神名帳云筑前国宗像郡宗像神社(むなかたじんじや)[社啓蒙]胸肩社云々○一説ふ宗像郡田島村ふあり、蓋筑前大和山城以上三所ふ宗像の社あり三神共ふ素盞烏尊(すさのをのみこと)の女(むすめ)田心姫湍織津姫市杵姫(たごりひめいちきしまひめ)とくわ、

宝生咲の梅(ほうしやうさきのうめ)

室(むろ)の内或ハ土蔵の内ふ炉火(ろくわ)を儲(まうけ)ることを暖(あたゝ)むる時ハ其火気(かき)ふ感(かん)じて忽(たちまち)ち開(ひら)くこれと室咲(むろざき)の梅(うめ)とらふ、

十一月

胸搗(むねつき)

[俳諧歳時記]むねつきハ食(くら)年(とし)の暮ふ人家の門(かど)ふとらむ

雪とあらハし、手を以て胸をさゝき、節季さしらゝく
といひて錢をもとめ、これを胸搞といふ、三十六番職
人哥合ふるにこの遺殘もとりハ今
節季にといふ者是あり云々

子

さゝ鳴 貞享式 此名ハ古抄より啼の字と結
びて冬とあなれど鶯の子啼とハ名
目も長々まゞハ啼の字あくまでも
冬至のころより鳴君ふゐもあれ
ゐよのゝて鶯のさゝ啼といふハ子の字あも及ずしき
し、〇青藍云俳諧歳時記ふ冬日鶯藪中ふ鳴、これ
とさゝ鳴らふと云、此説むざゐもうもらぐ愚按ぞるう
さゝハふしの義鶯の子の鳴うもらひとい
ふ意ふ出ッ、

兼三冬物 打餌

たの部 雁 犬

浮寝鳥

みの部 水鳥

薄氷

詩云戦々兢々 如履 薄氷

埋火

後拾遺 埋火のわさりハ春のこゝちして
ふる雪を花とこそ見、素意法師

うるゝ

十一月 鶯の

うぐひす

鰡の属なり、鮧ハ俗字ふ、正字未詳、此魚目
大ふして潤ふようて名とを、河州の海濱ふ多く来るときを季ふ
ふて京師の市ふひさくそのふ多く来るときを季ふ
用ふ、〇青藍云筱養集ふ二番草取もとさゝぞ穂ふ
いでゝとりる前句ふ灰打〳〵〳〵うるゝ一枚や
いふ附あれバ句体うようて雑るをゑゝ、

十月

うぐひす

晦日 九条東洞院よあり則宇賀の辻と称ス、

宇賀祭

雍州府志 九條烏丸宇賀のお云、両所とゝふ宇賀祭
の儀ふハ真言家の書ふ住吉の土俗十一月晦日家事を
棄て専ら倉稲魂と祭る、古の遺風ふりとゝゑあり、

梅宮祭

上午〇一年ふ両度あり、

探梅

無言抄 早梅と尋る心あり、

馮学上探梅詩

一枕悠々夢覚遅蕤賓花影午陰移起来
檻外探春信開到東軒第幾枝〇打寄て花ふさ
ぐと梅椿芭蕉翁此句と出されバふ各春季の服ゐ
りもいハ羽甚むづりて時物の表と聞て一句の主人公
とゝぐもゝと、日頃いまゝ〳〵ハ多く冬季の服ゐそと

申されるゝハ降こむまでふ

初雪の宿ゝそ附くりそ

十一月 **温糟粥** 臘八

粥 八日 増山の井 九山ゝそも又禁中ゝそも有ゝ 御献

行事 温糟粥、醴、飫、飯栗、菜ヲコマカニキリワカシテ、

ヰラスゝ、 三水記 本朝ゝそいふ臘八粥を温糟粥と名く、

今日造う所とうるふ昆布、串柿、大豆、粉藥を相合し、

檀特山ゝそ非非想と学び、二月八日成道ス、周の二月ハ夏の十月之 傳燈録 歓迎佛

夢梁録 十一月八日と寺院ゝそ臘八とふく大 **波等等**

刹等の寺、倶ふ五味粥と設く名と臘八粥と云、

滑稽雑談 廿日より乞人の妻女白綿巾と以て頭向

と覆ひ、腰ふ赤き前垂を掛手ふ籃と携へ遍く人家

と歴て米銭をこひ、ごうら波等等と称ゝ廿九日ふ至く

止む 年中行事 節季ハ諸国ふあり、波等等とふハ京師

ふのことありて他所ふあゝ、

十二月 **荷前の使** 十三日 荷前の使十二月十三日或

ハ吉日をえらびゝ差

の兼三冬物 **鵜鶏** 鵜のくひをゝ

抄ふゝそゝろ、諸國より献る御調の稲

と、十陵八墓へ奉らせるゝふその使之、 **花** との部ふ併せ出之、

く十月口切 紀事 此月良賤おのくゝ茶会

壷の口切とふゝ今月の始より臘月ふ至る九膳食と

会席と称し家の豊倹ふ随て佳肴美味と求めこと

と調椀折布ふ至る迄ゝそ新ふそ、中畧 九茶壷の蓋

の間ふ糊と以て堅く紙と貼本風濕茶と侵ことと

念ふ故ありゝ初冬ふ至て小刀と以て紙と貼し合縫を

截盖とひらく茶と取、これと壷の口切とふ、〇利休日

壷の口切の節ハ橙黄ゝ橘緑りの時

〇口切やゝ汝をよぶハ金の事 其ハ角 **養三冬ゝ物**

蕈羹爐 湯婆温石の類病身虚弱の人懐と煖るやみゝ **蓴菁、蓴漬**

本朝食鑑 蕪菁の葉茎と採ゝ淹菊ゝ収蔵これ

と蓴漬と号も、羊と経て又佳ゝ江州の製造と近江

漬と号し珍ゝそ、羊と経て酸味と生ずるものおゝ佳

ゝ賀茂の里人の造るを酸蓴と号しこれと賞美ゝ

朽葉 一説ふくち葉ハ色と結びこも冬ちの久朽の字重き故あり **くゝら野** 八雲御抄 冬の野とのハ〇冬野の枯くゝれるをいふ 首 清野と混ぞべ〳〵ぞ〇くゝら野のさゝぬが下ふあく鶉そのもあ〳〵ふ冬ハ 鷹の類あ〳〵て大ふ悍き者 未ふくり道因法師 **角鷹** 之全体の形色雄雄大小皆鷹ふて同じ、鷹るより大ふるて三倍せり、雌ふ似て小之 大和本草 中上ふハ角鷹とも養て鳥と捕ふゝ **草枯** ぬ鴨もあり 利牛二伊佐奈状ち畧鰡ふ似て肥て凹く長く周りと等し、剣ぎハ、状ち其色蒼黒ゝ〳〵て鱗あ〳〵、鼻の上の骨高く起り頂の上頭の前ふ潮と吹ふあり、口濶く下唇上唇より長くて頷の前ふ出て舌もまと廣し、凡鯨六種あり、性喜て鰯と嗜て諸魚ふ敵せまど、海船若尾鰭ふふく ときハ必覆を冬ハ北より南ふ行春ハ南より北ふゆく、肥州五島平戸辺ハ節分の前後と盛ふて、紀州熊野浦ハ仲冬ふ盛ふ〳〵それと捕ふゝ、鯨と刺鉾と呼て森 **鯨突** 和漢三才圖会 鯨音擎 鰹本字海鯨勇奥方 薬

とりふ樫木を以て柄とあり、鉾の頭ふ縄と著て船の柱ふつるゝ、其鉾鯨ふ中るときハ柄ぬけて肉ふ入鯨の動作ふまぎれて深〳〵肉ふ入てゆ抜ま、鉾の柄校るとゝも縄着てある故ふ失ぞ、一船の進退を掌ど人と呼て羽指とゆ長き袖短き衫を被て宛も軍船の如し、近頃大縄の細と用ひて豫めそこと繋ぎ木林と椰故ふ百ふ一失あり、

十月 **獻屐襪** 崔浩女儀云近古婦人常冬至の日を以て屐襪を贈男姑ふ上る長至と践の義ゝ 説文 襪、足衣也 和名抄 襪 和名之太久豆 越谷五山遺稿 我朝の製ハ大指のそれめもし、足袋ハ元来襪ありゝ **空也忌** 三日 暁の鉢扣 空也上人ハ天禄三年九月十一日寂ふ、年七十と元亨釈書ふゑゝり、〇空也堂ハ極楽寺ゝ号ふ、四条坊門の南、堀川の東ふあり、鉢叩ホ此堂と守ふ傳ふ云極楽寺ハ元三条櫛笥ふあり、櫛笥道場と称ふむりゝ空也上人勝光夜々執行念佛と唱へ洛中と巡る北山ふ住ゝときゝ毎夜鹿来る上人其声と愛ゝて閑居の友とも、一夜来らぞ、心

ふ怪む、明日獵者来りて云、昨夜この處ふ於て鹿を
殺すこと、上人大ふ驚き悲〳〵その皮と角とこひ〳〵
皮を衆〳〵角と杖頭ふ挿て遺愛の物とこ、獵者も
又ことを悔こ愧て、忽ち剃髪して僧となる、今の鉢
扣ハこの齋あり、空也晩年修行のころ、京を出て東行と、
徒弟ふ謂て曰く、今日寺と出る日と以て己が命日と
定むと、故ふ其日と以て法事と修すとこの院中十八家
ありこの中年老のかの剃髪して僧となり、代々空の
字と法名ふ加ふるの餘ハ有髪妻帯みて常ふ茶筌
を製し市中洛外の三昧と巡りて各鉦とうち〳〵佛名と唱念
夜々市中洛外の三昧と巡りて各鉦とうち〳〵佛名と唱念
ふ或ハ竹杖と以て携ふるところの瓢とうち〳〵口〳〵無
常の詞と唱へ施物あるときハこの瓢ふ受く、瓢と以て
鉄鉢と代ふ故ふ鉢扣と称す、扣くところの竹杖ハ貴
船檀上の竹と用ふ上人薨く北山貴船檀上の菴ふ葬
居の遺意こ

風俗文選 鉢扣辞 去云々

来云々

こゝ修行ハ瓢
蕈とふらし、鉦打ちゝき、三人つまそともらゝひのけ
合ての訓ふ其唱哥ハ空也の作あり、中畧常ハ杖の先

ふ茶筌をゝ〳〵、大路小路より出て商ふ、中畧ゆきとまり、或ハ四方ふうらけ、法師あらぬ姿の衣引うけ
たれごそまち墨染あり〳〵次なちく、萌黄ふ鷹の
羽打ちがへる紋どうけく着ゝるべく月雪ふ名ハ甚之
丞と越人も呉じ侍る、中畧横雲の影ふうらびる
声して出来まり、けふ老ぬると足ぬるきこゝろのハ友ゝもち
あとあるゝおれてひとり今ふもありぬらんと翁の長
嘯の墓もめぐるう鉢ゝきこと聞えのハ〳〵この暁

吾山遺稿 鉢ゝきこ瓢とかりて

の事みぞぐりる
て訓ふ和讃の無常をまち来ることまだ誰ふ此苦と
のがるゝき、花ゆうあり〳〵残をゝる、此外和讃多し略之此哥と声をつゝ良
ふ訓いれて

鹿讀 本朝食鑑 本邦

勧進をる〳〵、

十一月 藥食

鹿を食をる者稀ふ忌多〳〵ゝて、此如茂春日の神使
の故ふ故ふ世人鹿の訓を忌ゝ音と以て鹿ふ鹿
肉甘温ありて毒ふあゝ、冬時ふ食ふべし、他月宜しから
ず、故ふ寒中特ふ用之中と補ひ熱と益一切の風虚

と療し血脈を調ふ故ふ是を藥
食ふの諸獣も又それをこと食ふ者なり

十月八日

手花 大和本草 菜の形蒟蒻の如く又かくての葉のかくして甚だ大なると盤の如し冬凋落
ぜ葉のもと一ありて岐多し七八よわるる白花を
開き黒き實ありる毒あり、木の高サ五六尺ふ過ぎず、**兼**

三冬物 **山眠** 卽遊録 冬山慘淡
うして眠るが如し、**十月山**

神祭 上己日〇一年ふ両度あり、**山神樂**
夏のやの部ふ注そ
内侍所の神 **山の神祭** 神代巻 伊弉諾尊
樂ふりとそ、 軻遇突智命を斬
て五段とそ、此各五の山祇と
山林もそろる畿内の民この
祭之山の神の社の辺の樹上
きりつけ、神供を備へ燎火をく
樹上ふ幣を
塚建る 節分の夜吉田神祇官ふおゐて行ふる、
その式庭上ふ塚と築くこれを厄塚と云、

正月十九日ふ至
て解拂ふまり、**厄拂、厄落** 紀事 四十二歳の
男子自ら犢鼻褌
を落ふ是をふぐりおとしと厄と拂ふの義ふ今
宵乞人綿巾を以て面を覆ひ自疫拂疫落しと称し
終夜街衢を徃来を、〇唐土ふも丐者のゆくえ
十人群をまり、神思ふ裝ひ男婦鑼鼓を以て門を
巡り銭をこふ厄と拂ふの義ふ今夜胡と名く又駆逐の類、

目鱣取 和漢三才圖会八ッ目字奈岐北国の川沢ふ
多し大抵尺ばかり、大なるものハ二三尺背
蒼黒くして光あり、腹の色稍浅し、其首尖らを口裂
ぞして円く、歯細ふ小く針鋒の如し、両眼の後ふ各
七點あり、目の如く星の如く、錐の穴の如し、目をこゆふ
八數あり、故ふ名く、〇江海處々ふあり、信州諏訪の
海ふ取りのこ名産とそ、上諏訪下諏訪一里ばかり冬月
氷をもて厚さ二三尺ふ及ぶこの時ふ至つて鱣と採る、
先氷の上ふ小家と営む小火と焚て穴と穿ちこの穴ふ
柱と建漁者の休ふ所とそ、又細或ハ縄を入べき穴を

ふとろろ焼火と以てさゝて延縄と入共餌と以て鈎
ところとその数影し氷あるところ攪を用ふ、

十月 松風の時雨

松風と時雨の音ふ聞ちがたきあり、

兼三冬物 週炭 凡茶会の炭又花ハ上手下手

あり故ふ未熟の人常ふ数回こまごまと習ふ同志相集つて上座より下座ふ至る迄交く炭を置花と神むの業を学ふ事と週り炭又週り花と

十一月 當田宗祭 上卯日 松尾祭 同日

一年ふ両度あり、夏のまの部ふ注をこ、

十二月 豆打 せの部節分の条ふ 天平 御暦

注 亥の子

十月 玄猪 亥の子の餅

初冬其月亥の日亥の刻より餅を食へば病ひなし、錦繍万花谷此餅と食へハ万病ご除く

政事要畧 豕ハ多子ある者あり毎年十二子と生む閏年ふハ十三子と生む故ふ婦人ごとと羨そ、此

日ふ至つて餅と供〳〵て神と祈る〇ねの子のて其始詳ならざるといへども延喜式ふ載らるされバ古くよりあるべし〳〵亥の子の餅ハ大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖此七種の粉と合せてつくるよし、正親町公通卿の抄并御湯殿記ホよその式委〳〵ここに久〇一説ふ摂刕能勢郡木代村ふ門太夫といふ者住せて、その家代々亥の子の餅を貢もその先神功皇后ふ起まり、むし〳〵此所及び切畑大丸の近里ハ山城八幡の神領よりこゝと奉ぐこのより、今善法寺よりこゝと奉ぐこのより、

下元日 水官餅尼書言 十九日

故事 正月上元ハ天官福を賜ふ七月中元ふハ地官罪を赦も、十月下元ふハ水官厄を解も水官主禄、百司人吉凶要云、下元三品尼を解も水官厄と解ス事文類聚正一間の善悪を検察〳〵、天関ふ詣て進呈ご、

十月 冬ごろ 一書ふ冬ごろとハ立冬のころをいふべし、

天和本草 冬壮丹八月より葉出て十月より花さく、臘寒の時も花あり、九却此るハ人功を以て大地造

化の力とめをそそてそれと成怪むべし〳〵

猿蓑 此寒さ牡丹の花のまい穂車

雪吹 雪吹倒し

雪凡相交るを雪吹といふ

北越雪譜 暖國ゝ雪吹

を花のちるさまゝ擬しくる詩作詠哥あ

衾雪

玉海集 哥枕そ〳〵よまの絵衾雪山姫の寐道具か

ら〳〵衾雪ニのうてハ根さゝり上のふをま雪〇氷の

水と蔽ひくるを氷の衣とふ同〳〵雪の物と

厚く蔽ひ包くるを衾ふことゝてのふるべし〳〵、富

士の雪

御今 ふハふのねふもふけぬれバその夜ゝりゝとよめる方葉

望ふけぬれバその夜ゝりゝとよめる方葉

の哥と引て雑ゝを、無言抄 ふハ赤人の田子の浦の哥、

新古今冬の部ふ入ゝりて句体もよべし〳〵俗し

毛吹草 もあひ草 のくべくをべく多ゝ

ふ入たるゝこと多ゝれバこゝもとゝぐ

敷衾 小衾

和漢三才圖会 衾寝衣ニ〇古き衾哀情

紙衾

あり 白氏文集 鴛鴦瓦冷霜花重舊

枕藁衾誰與共〇紙衾ハ紙ふそ造ゝるゝ貧賤

の者の用ふるテントノジ是あり、猿蓑 たゝ〳〵目ハ我手

のあとそ紙

衾 曽良

蒲團

本草綱目 蒲席釈名云薦

皆蒲及び稲藁を以てゝ

為る精粗異あり、呉人龍鬚草を

今紺布と以てゝ

ふくらせて 正字蜉 冬小魚を取ふ柴を多く縦けその

内ふ餌を入ゝれを江ふ沈ゝ置ハ江中の魚集り入其下

ふもぐり細を入引上て取あり、城州淀伏見の江ゝ

多くこれあり、夫木 ふゝつけしおどろゝ下ふもぐ

のんとすれき身を

豚魚 河豚魚

河豚汁 腹立雖 古方

西施乳 選注

いふふぐん 俊頼

豚ハ猪の小き者其性よく嗔ゝる故ふ憤豚の称あり、

魚中鯸鮧まことよく嗔ゝる故ふ河豚の称あり、北山経

其腹腴を重じ呼て西施乳ゝもゝ〇陶隠云河豚魚

小ことゝもゝ獺及び大魚敢て啖もゝ惟人ふ毒ゝる

のゝふあゝぎ又よく物を毒もゝ煮ゝるときハ煤焔中ふ落

る事を忌む肝及び子ふ大毒あり、食べゝもゝ

滑稽

雜談 和産ふ腹立腋として、河豚ふ似て小き魚あり味ひ劣る是を地ふ投又ハ木の枝と以て動かしときハ魚腹を立て鞠の如くふくるくろ〳〵と是ふうん難波の浦又大円座ふうて泡の如しといふ〳〵堺の浦あごふまち〳〵侍るとまん河豚の類あ〳〵ん冬ハ季ふ用ふべきを○俗饅字と用ふ誤〳〵

風呂吹大根 骨董集 甲陽軍鑑云熟風呂好〳〵よく吹申さるハ云〳〵本朝諸士百家記風呂をもてなすに条三云上手の吹手一両人云〳〵伊勢人の物語を聞ふ風呂を吹とハ空風呂ふあるとと〳〵垢とかくるの風呂ふいる者の身上ふ息を吹かけて垢をとくありもろまれバ息を吹かけるる所ふ潤ひ出て垢よく落るとありこれを風呂吹とハ云〳〵さて大根と熟く蒸して煙立るの立ぐあるを大根の風呂吹とハ云ふもあらん又風吹かけて食ふさまよりハ風呂吹ふ似くるゆゑあらん冬〳〵

籠 居宅ふ籠るを寒風をふせぎて〳〵新撰六帖 あれまうこみの岩屋のふもとりのぐりけりのそそやまとうそ 俗俳 金屏の松の古さよ冬籠

芭蕉○草木の凋こ冬枯るるとも冬籠とハ云ふ是ハ冬ごもりせる草も木も春ふもらさぬ花ご咲るを貫 寒氣を防ぐん料ふ風のうふところをふさぎ之

冬構 砂よけ風よけとて北の方ふ莚をご張まわし、すべく冬向の支度利を構るあり、

冬の蜂 猿蓑 今ハ世とものむけ〳〵へる人冬のそら 其角 冬の蜂 是 寒梅 蔓

冬の蠅 続虚栗 あくまれてなく人冬のそら 其角

冬の梅 大和本草 八朔梅ハ八朔のころより花ふひらく重あり、西土ふて冬至ふ至て多く花ふひらく梅の鬼あり、畿内の寒氣ハ冬至ふ至て多くいふ九月より開く八重あり、但九月ふ開くハ狂花なるごし、臘月ふ開くと正時とも故の寒紅梅とのふ

冬木の櫻 古今和歌集 ふゆごもりおもへるよりもさくらの花ご咲るとのそふあらざ、

冬櫻 小樹あり花葉彼岸櫻ふ似てその枝の櫻あり、垂ざ冬月花をひらく盆ふるやく扒の傍ふ賞ざ又

冬木立 夏木立ハ茂てるるをいひ、八重櫻あり稀ふ、冬木立ハ葉の脱落ふるを

さまなど

冬の月 【源氏朝顔の巻】冬の夜のすめる月に雪のひかりあひたる空こそあやしう色なきものゝ身にしみて此世の外のことまでおもひながされおもしろさもあはれさも残らぬをりなれすさまじきためしにいひおきけん人のこゝろあさゝよとて御簾まきあげさせ給ふ【河海抄】菅日記云しはすの望のころ月いとあかきにおのがかつらのかげにみる人こそあれわれはすさまじの師走の月夜もめでゝみる人もありけり【枕草紙】すさまじきものおうなのけさうしはすの月夜云々

冬の日 冬の日のあはれくて暮ぬるや　孚石

冬の夜 行燈で水菜そろへる冬夜かな　許六

冬田 近よれば鷺さへ逃て冬田哉　百明

冬椿 早咲の椿あり、

冬枯 草木の枯るゝをいふ、

冬の草 枯るゝともいひ、枯残りたるをもいふべし、

冬の山 草木枯て淋しきさまをいふ、

冬の川 水の涸るゝさまをいふ、

冬の雨 おもしろし雪にやならん冬の雨　[illegible]

十一月

吹革祭 八日 祭る所智恩寺の鎮守元賀茂明神なり、或人云、三十九世満誉和尚稲荷八幡をくわんじやうありしより稲荷の火焼といふ事ありて、十一月八日鍛冶鑄冶石工の徒まで多く吹革をとゝのへて此家々の神を祭る、江戸にて八八日の未明吹革祭ありて其家より橘柑を投うつ、群童争ひてこれを拾ふ、毎年此戯を以家例とす、

十二月

鰤 初鰤として、その部に注ス、

札納 【紀事】良賤年中受る所の諸社の札を神社に納む、これを札納といふ、

古暦 新暦に對していふ、

冬を惜む 【向景明除夜詩】云今年今日不可留、明日明年更可愁、

分歳 【風土記】除夜其先事を祭る、長幼聚て飲む、祝頌して散ず、これを分歳といふ、

こ

十月

更衣 【公事根元】十月一日は先御衣がへあり、掃部寮夏の御装束を撤して冬のをあらたむ、まづ天皇南殿に出御ありて節會あり、これを孟冬の旬とは申也、

興福寺法華

會　南都興福寺ニ於テ修ス、元亨釈書　和銅三年三月、藤原不比等、和州平城ニ於テ之ヲ建ツ、其大殿ノ像大織冠造ル所ナリ、公事根源　九月廿日ヨリ七日ノ間、南円堂ニシテ妙法ノ大会ヲ行フ、コレヲ十月六日長岡ノ大臣内裏ノ御忌日ヨリシテ始テ行ヒ、又コノ会ヲ始テ行ヒシヨリ、六日ニ此会ト行ヒシナリ、

金毘羅祭　十日　讃州鵜足郡ニアリ、祭ル神二座、或ハ三輪大明神、或ハ素盞烏尊、当山ノ形チ象ノ頭ニ似タリ、故ニ象頭山ト号ス、開基詳ナラズ、一説ニ傳教大師入唐帰朝ノ日、金毘羅神ト勧請シ、梵ヨリ燈十八町、悉ク石階峻岨アリ、又崇徳院ノ廟ト以テ金毘羅大権現ト称ス、合セ祭ルトモイヘリ、○京安井観性寺ニ崇徳院ノ社アリ、金毘羅ノ社ト称ス、八月二十六日祭礼アリ、

小春　日　初学記　十月八天時和暖春ニ

小六月　似タリ、ユヘニ小春月トイフ、**颱**　和訓栞　本朝ノ

ノ義ナルベシ、木枯ニアラシ、嵐ヲアラシトヨムハ音便ニテ、五十嵐ヲイガラシトヨムモ同ジ、字書ニ風過ル

上ヲ颱トイフ、颶モ同ニ、風ハ倭ノ俗字ナリ、

黄三冬ノ物

粉雪　つゆく草　コマカニ

コノ雪丹波ノ雪トイフハ雪ハ米ヲイフヒトシクヘルヲ似タリトイヘリ、丹波ヲフトヲ云ヘリ、

小米雪　見立テイフ　遠近集　降ル雪ヲ篩ヒノ小米ニ

氷　こおり　豊近

月令　孟冬之月氷始テ堅ル、仲冬之月氷益壮ナリ、季冬之月氷方盛ナリ、○孫卿子曰、氷生于水而寒于水、○薄氷、厚氷、氷柱、垂氷、銀竹、氷花、氷面鏡、ホ各頭字ノ部ヨリ出テ注ス、

氷ノこび　藻塩草　凍閉ル也　新撰六帖　冬来テハ田川ノ水ノこびヲ打ソヘテ

氷　こおり　為家

の声　揚廷秀　敲氷文曰、猗子金盆照暁氷、彩絲穿取當銀鉦、敲成王磬穿林響、忽作玻瓈碎地声、○一説ニ大寒ノ時氷ヲ音アルヲトフ、

氷の衣　毛吹草　水張ルハ氷ノ衣トフ、玉海集　水干ノ衣トイフソレ氷ノ如シ、遠近集　氷モヤ羅綾ノ衣下紅葉○青藍云ヲ物ト蔽ヒ包ム

物と衣とのみな同じく、氷の水と蔽ひ、ころもまとふそのうちに、さまざまの上みな出せる句意と推てもつべし、但年浪草ゐ出せる説ハ附会とうべし、**氷の花**　酉陽雑俎　開成の末阿陽縣の黄魚池の氷、花をそうらくの如し、**凍**　注不及　**凝鮒**　煮て凝と鮒といふ、**火燵**　置炬燵　骨董集　火燵とハものゝ辺むうへにきるうのそうり火燵のもの以前ハ物ゐ尻うけて火鉢ゐそ置と後やうやう古き絵巻物ふその体ゝそうり　猿蓑　こつゝぬ旅のそろや置そつ芭蕉　**木の葉**　落葉　すくせと　落葉と木の葉、ハ、ともべいふときハ少し趣意ごびあり其意と浮べし　つゝく草　木の葉落るも先ッ落てめぐむふハ下よりさざ〳〵つゝふこそ〳〵落るより、**木の葉の雨**、**木の葉七時雨**　白氏文集　風吹枯木晴天雨　千載集　まぎらるる摘の扱屋ゐ音ハ〳〵てから

ぬ時雨や木の葉ちるく〳〵ん、**木の葉衣**　南越志　獲人冬以鵝毛二編木の葉を雑て衣とそ、太平廣記　女仙部云秦の時婦人草葉を衣る、**このてとこ**　なの部生海苔の条よそへ、**兄鷂**　鷂の雄より脚極めそ細く〳〵てをもそ、鷂以下の小鳥と捉るちうと、

十一月

暦の奏　朔日　公事根元　中務省より明年の暦を奉るむうし、ハ主上南殿ゐ出御ありてこれを御覧あり、出御あるときハ内侍所ゐつく〳〵暦を奉るむうし、百済の博士ご奉る、雍州府志　暦毎年南都幸徳井ゐ加茂氏の新暦と受く、梓ゐ鏤め世ゐ行ふる、今事、大経師暦と称も、〇今免許と蒙つて暦を販く所、山田伊勢三嶋伊豆江戸武蔵南部陸奥世ゐ南部のめくら暦といふ多く重く、**五節帳基試**　中の丗　御前試　殿上淵　日月の識とも、

辛中の寅　童女御覧　卯日　公事根元　中の丗の日とバ五節

狩の使

主上御覧あり、五節の舞姫、五人あり、陪従の儀式
ありしとぞ、〇暁参と云ふは、皆参るとの事なり、
帳基ふ出御あり、殿上人とも脂燭と候て、主上御直衣
よ御指貫ふく、御沓と召る、主上の御指貫と召る
こと此時の外いまだ、但御鞠の時ハ、帳基の試よ准し
て召るゝまゝり、帳基ふおりて、まをほど乱舞ありしぐさ、
らをとうふ、大哥小哥あるべしとぞ、江次才 本朝月
令ニ云五節の舞ハ、浄御原天皇の制製をる所ぐ相傳云
天皇吉野宮ふ御を日暮ふ琴を弾さるふ真あり、俄尓
ふ前ある岫より雲気忽ちふ起る、疑ふらくハ、高唐神
女の如き、髪髣髴として曲ふ應ぐて舞ふ、他ふ見る人ハ、
袖と擧て五さひ変もこれと五節と云ゝ、其哥ことあ
どもをゝめきひをもかゝらさまをたゝふまゝそをゝさび
もと、〇殿上の淵酔 公事根元 中の寅の日朗詠今
様あどゝさひて、三献そゝ乱舞あり、次才ハ沓をとりて
北の陣とめぐりて五節所よむふその後所々ふ参りて
推参るまり、〇狩の使 同上 むかしハ狩の使ちぐ
りふとありそれハ五節所ふまろらんとも交野の

雉子ふどめさるゝ使ありしと狩の使とハ申まり、〇
童女御覧 公事根元頭書 卯の日童女御覧の支
雲岡抔ふ詳ふ、ハ、兵竹基の前の下ふ下仕参上の道
ふ、兼香殿西橋よりふ、延上ふ降立て南行を、但竹
基の下ふ至て下仕竹基の西の頭ふ、ハ、歩ませふ
む、蔵人東の頭より行合故實あり、近代案内ふらぬ
云ゝ 裏書 童女御前ふ参り雲客これふ、ハ、見るべし、小前張
副ふ、〇豊明の条のごとし、
かの部神遊 心葉 との部豊の明
哥の条ふ注ス、 後日の能
りの条ふ出ス、
との部御祭
の条ふ注を、 暦賣 暦の事前ふ
ありゝ、 十一月 御
躰御卜奏 十日 六月もあり、神祇官中臣卜
のことト 部ふと卜て、明年六月まぐ
して奏を、 事納 八日 用捨箱 無住雑談集ニ云、む
度まうふ次第ふ、ハ、豊明強くして非時とゝづけゝ日中
ふ食し、後ふ山も奈良も三度食もゞのごとく事と

山中にハいまだ未申の時ばかりに非時して法師ばら坂本へ下りぬれバ夕方寄合て事と名づけて我々世事して食をとゝのへしよし見えたる事を載たり、按ずるに十二月ハ日の短き頃なれバ年の暮ハ事せハしき故に八日を限りて二食とするならん当時の價家の風俗にて事納とよび二月八日も漸あたゝかなれバ八日より三度食をする事始めとのふるハいはれあるや、江戸鹿子 貞享 二月八日事始十二月八日事納 とあり今の俗二月を事納十二月を事初とゆふもあるめり、正月の式よりかぞへたるし事ならんと云〻○今ハ事をつゝしみて事納 山岱 此外十二月と事とすゝむる證句多し今日いとこ煮を食す、還魂紙料 料理物語 寛永 云いとこにハ、あづき、牛房、豆腐、芋、大根、焼栗、くわゐなどを中味噌にてかゆくに煮申なりいとこと云説」とあり、追々に煮る甥々に似るをもぢりし名の通ふを以て従弟煮といふなるべし○月並世話 戸口に竃をつるハ方相の目にかたどる人、邪気をはらふ事なりと云〻一説におとこに竃といふる八九字のまもりなりと云〻春の この部事始の条をもあはすべし、

五條天神祭

節分 勝の餅賣 祭る神大巳貴少彦名をまつりて祭礼

白朮賣 九月十日に行ふ毎歳節分の夜京師の士民参詣多し、白朮を買てこれを自家に燃く、又小園子の餅と食ふこの餅社の傍なる勝軍地蔵に供ずる所の餅なりよりて勝の餅といふ、或ハ由ちかひどうもんといふより名をとるともいへりこの二物舊例によりて官よりこれを賣らしむ、近世その料を社司にわたして製せしむとぞ、

暦の果、暦巻納、暦巻返

古哥に多くよめり 新撰六帖 一とせのまたこの奥にまきこめつせくのこる日数のほどもなき 知家

乙亥

十月

夷講

廿日この月廿日或ハ家例によりて日定らず、商家の徒西宮大神宮をまつる、本朝通紀 推古天皇九年三月聖德太子始めて市を設けて商買をなさしむ、このとき蛭子神にちかひて商買鎮守の神とさだめ給ふと云〻、又此神鈎竿をもて像と設るハ日本紀に載る所事代主命遊行して出雲國三穂の嵜に在し、鈎魚を以て楽とせらるゝによりて、

この故ふ今日うおらど鰯と供もるあり、又蛭子の像前ふおいて賓主相混ず、盃盤器物ふいくるまで皆價ど定む、或ハ千両或ハ万両賣る者諾もるときハかふらど千とうこまと夷講の賣買とふハ一時酒盃の戯ふ過ず、

波雨 同の部時雨の条ふ注もゝ、

兼三冬物悦哉 数品あり、

十一月 殿上の淵酔 この部五節の条ふ出ツ、

十二月 天智天皇御國忌 公事根元 崇福寺ふて行もる、朱鳥二年より もゞしまる、天智天皇ハ舒明天皇の御子、御母ハ皇極天皇ふあり、御位ふつゝせてまのりて近江國志賀の郡大津の宮ふゆゝしゝき、中興の君ふそおいゝまもそして国忌ハときふおもこゞゝそおらこまるどども、これいまゞゝこゝろゝゝ事ととゝりあきど太祖廟ともゝ申もゞさゝや、崇福寺ハ近江國志賀寺まりなゞらの寺ととゝ詠るよゝハ

雲御抄ふあり、天智天皇の御時ごの地ふ瑞花ある故ふ精舎を建立ふもりて元亨釈書ふえゑぐろ

あ 冬の草の惣名

十月 秋無草 藏王 花ちりてその名もゝふ秋無草ともふおける々ゝのちゝ露

兼三冬物 あぢむら かの部鳧の条ふ注す、

華臍魚 老婆魚、綾魚、琵琶魚の諸名あり 寧波府志 綾魚ふ盖其腹ふ帯あり、帗子の如く生ゝて其上ふ附く故ふ名くゝその形ち科斗の如くゝて大ふるりの盤の如ゝ、

呉都賦 琵琶魚鱗ふくゝて形ち琵琶う似うり、

大和本草 国俗鮎鰊と称も未ご出處ふ考ず、恐らくハ七女抔ゝべゝ坂東ふゝゝし、

絽代 絽代本 絽代守 西州ふハ莇ゝ冬ハ味うくゝ春ハ味劣る、

指掌雑字 魚落潮来るときハ魚まゝ出ツ、秋の枝折 絽代と書、絽の代ッまり、魚とゝるもゞゝうあり、宇治近江の田上おゝふ永魚ゝらんゝあふうつ物ゝ、

藻塩草 絽代人とハ宇治ふ絽代と

りし所ありおもきを住家として細代と司る者をいふ細代守細代人ともいへり【猿蓑】とがうさと数珠もおもきも細代守　丈草○さゝき込ひ音や夜更の細代杭　林陰

厚氷【神异記】北方に氷あり厚さ百丈○日の恩やたちまちくだくあつ氷　子葉

霰　あられ【玉】あられ　あられ酒【大戴礼】曾子云陽の専気霰となる、蓋盛陰の気雨水にある時ハ凝滞して雪となる、陽気搏して之を脅て相入ざるときハ消散してくだり水に因て霰となる○霰酒ハ南都の産なり、又霙酒ともいふ酒中霰に似たる糟あり【天子集】玉よりも酒ちりかゝる霰かな○年浪草に霰地の錦霰釜ホを冬季の部に出せるハあやまりし、古抄にも離とせし、

あがけの鷹【和漢三才図会】巣を離ると自餌を養ふことあたハざるとき捕へ来る者を網掛といふ、【新撰六帖】山がへるあがけの鷹の手もなれてもつてうちおらす君もあるかな　為家

霰魚　魚の部くふの条みるべし、

皸　赤切

十一月　赤豆の粥【荊楚歳時記】共工氏不才の子あり冬至の日を以て死して疫鬼となる赤小豆を畏る故に此日赤豆粥を作り食してこれを禳ふ、

あかがしハ【増山の井】本邦にも冬至にハあらねど此朔日にハあかがしハとて赤小豆の飯を用ることあり、【猿蓑】膳まハりの外にもれなし赤柏　良品

相嘗祭【先代旧事紀】上ノ卯今日天皇正締殿に幸し、三公九卿を徴相嘗の詔を宣下し玉ふハ、三輪住吉熊野熱田廣田射駒降劔大和津島の大社と祭る、其国の国司に命じて、其国の宮倉の初米を以てこれを供ス、其社司神巫ホ官幣を賜ひて締礼を行ふ、

阿知女【公事根元】この祭近きころ絶てさらになし、かの部神楽の条に出ツ、

十二月　浅草観音追儺　除夜より七日　江戸金竜山浅草寺にあり今宵参詣堂中に充つ、初更のころ鬼形の者一人堂外に出、又一人方相氏の仮面をかぶりたる者これを追て堂を巡る、後除疫の札三千枚を撒して諸人に与ふ、参

詣の人各爭ひ捨うて、排
ろうて自家の門ふ貼す、

十月 残菊の宴

公事根元 昔菊花の宴ハ九月九日ふそく又
群臣詩ど作ッて酒とい
たまふこと重陽ふ同し、
海石榴ふ同じくそ、其葉茶の葉
の如し、其実叫く長し、花冬ど盛ん、

さはひこめ

霜の異名あり 秘藏抄 さはひこめ
ゆくふこと
蓬ハうこと
てんり、

冴

字彙 冷
清甚也、

寒さ

寒き夜 ○有明
寒き朝 みそり
ひきこうき
寒れ去来、

さしそ

集の小き者あり、集ふ似て鶺
よりふ小し、鶺とる、朝奠すり、

十一月 里神樂

連哥秘抄 内裏の外ど忝く
わらべ神楽、八内裡ど本あり、内
侍川ど山神楽とふふとそり、

十二月 寂勝寺

灌頂

十五日 名勝志 土人云、寂勝寺の旧跡ハ岡崎村
の西二条通りの一町だり西ふあり、櫻
田とふ六勝寺の其一也、以呂波字類抄 保元三年十二
月十五日、寂勝寺ふて灌頂を始めて行りる、大僧正覚
明ごれて大阿闍梨とそ此寺の櫻と詠まる哥新勅
ふれてらへいまだりの春ぞともおこ白川の花の下陰雅縁

齋宮の繪馬

晦日 ○齋宮ハ伊勢國多気郡ふ
あり今齋宮村あり、多気の
都、或ハ竹の都と名く、増山の井 齋宮の樹下道の傍ふ
ふき祠あり、晦日の夜里人繪馬とうくる事あり、行疫
神とまぐひるとぎとそや、天王寺の道公法師熊野
より帰るさふこの樹下ふ宿し、繪馬の神うあひ、
行疫神の馬ふ乗ゆく音とをきくこの繪馬の神前駈
もるよりとかくうつるとありさて法華経讀誦の功力
ふよりてこの神補陀落山ふ生じ、觀音の券属とふ
とつまり侍り、すくかせり 齋宮ふ諸民詣て絵馬
と掛るその毛色とそて来年の秋の農業と占ふとぞ、

歳藏市

江戸日本橋の東二

町ぞう四日市ふあり、三河万歳江ニ小来りて脱士の
才蔵を傭ふあり、毎年四日市よそこの價をさごそて
傭ふそらくこまを、逆蓑との部岡見の条ごとぞし、

冬 十一月 季

冬物

銀竹

羅山子曰銀竹ハ雨どうのまり、季白詩云白雨映寒山、森々似銀竹一〇

垂氷と両説し、

切干製

切干ハ冬月菜蔬と切るとを糸の如くをこまと纖蘿蔔と云、

と両説し、

金海鼠

あの部生海鼠の条ふ出、

と名く、尾州多く製之ヲ

北窓塞

漢志大陰ハ北方北ハ伏ニ陽気下ニ伏を、

遮ふ擴げ晒乾を故切干

宮線

荊楚歳時記晋魏の間宮中紅線を以て一日影と量る冬至の後長きこと一綫と添ふ、

衣配

年のえごもの料ふおくこき人々ふ衣を贈り

支昌雑録唐の宮中ヲ功と以て日の長短と

挽る冬至の後常の日ふ比をレバ二線の功と増を、

十一月 添

とりふ、宇津保物語源氏玉葛の巻ふえそ

十月 維摩會

十日より南都興福寺ふおゐて十六日迄

こと修を、故事要含慶雲二年正一位大政大臣、聖朝安穏社稷傾覆ふきるめふ謹て弘誓と発し

この会と開く、元亨釈書齊明天皇三年十月内臣鎌子山階寺と建ツ維摩会と修を、陶原の家ふおく山階精舎と創ツ維摩会と設く、是維摩会の始まり、

無三 冬物

雪

大蔵礼天

地積陰温ふよりときハ雨どうり、寒ふあるときハ雪とふる、

春秋元命包陰陽凝て雪と成、

○六ツの花、玉の塵、衆雪、雪の部ふ注も、

雪花

韓詩外傳凡草木の花多く五出雪の花独り六出発願文正徳未年即木文考模

風やある夜ふそふ雪の花、菊芭因ふ云此雪の花の句ハ、五月雨やいる夜ふそふ松の月とある雪中菴蓼太が句ふよりハ先吟ふあり、

雪消し

紀事十一月多く雪ふる貴賤粉餅並菓実ホの物と

互ひに贈る、是を雪消しといふ、詞なり、これを食へば寒気を忘るゝの詞あり、**雪もよひ**　傍傘　雪もよひする冬くもり、時雨ふ凡のそんくもるをとゝふまり、雪のそひくるを雪もよひといふ、これ雪吹ふく物あり、**雪空**　雪の降　空と曇、**雪氣**、雪催ひ　雪げ、雪ごもり、雪催ひと同じ、**雪の聲**　新撰朗詠　苔庭木落、紅無跡雪確、月晴、雪有声　藤原明衡〇これバ垣小裏表あり雪の声　嵐雪〇青蓋雲月令博物筌ふ静ふ窓おのづから音をのこす、而ふ愚按ずるふさくらの月晴といふ合を、樹木或ハ竹をゞ積る雪の、風のために落る音とて、北地あて雪おそろしきところなるゆゑ、小應ずるをあり、これを雪おれ、雪ごもりなどゝいふ、**竿**　くさぐさ　又深雪のうち物のあらはれ立ちるを雪竿といふ、寒気指を墮をといふ是ゝ霜やけと同じ、**雪やけ**　**雪礫**、雪打　小石の如く雪を掴つゝめ、投打合と云、雪中の戯あり、**雪轉**　雪丸けるをいふ、**雪達磨**、新拾遺詞昏　雪山そて丈六のわらけとつくり奉るとて、供養もとゝてゝうめる云ゝ、**雪佛**、雪布袋、

枯尾花　此下ふくねむるもん雪佛　嵐雪　〇雪布袋、雪達磨ゝれ雪中の戯ふ作るゝ、張文潜戯小雪獅子　**雪獅子**　深山雪中獅ふかの良ゝを作る文あり畧之、**雪女**　現もゝこれを雪女とらふ雪の精ふ、**雪の山**　雪山と音ふふるべし、天竺の山の名ゝ雑ゝん、**雪の肌**　女の肌の白きをゝ雪ふことよそへらるゝ、**雪履**　注ふ　不及、**雪垣**　くさぐさ　北國大雪ふるところ、十月初より用意ゝて人家軒ゝろ〳〵遅しき先太材と立掛て、横ゝ結ひ筈ゝを編ゝ付て垣まゝ、深雪の内其陰ゝ道ゝゝて隣ゝ家へ通ずるあり、これを雪垣とらふ、

十一月　**虎耳**

神 さくらせつ 一名キジン神、花八四日、雪の下より名ゐ付て冬ごもりの季とす、十二月行年 ふるくそ状ゆう湖春 炭俵 行年よ京へと

め 十二月 和布苅の神事

晦日 長門國文字関の北ゐあり、隼人の社に称も、祭る神五座、玉依姫彦火々出見、豊玉姫不苔合、阿度目、磯良あり、祠の後ゐ一巨石ゐり、石ゐ因て祠をゝ、前ゐ謁殿舞殿神厨ゐり、謁殿の下に石の鳥居と建、鳥居と出ゞ石磴ありて海の底ゐ達も、虚潮日ごゐ、ごもとの窮むる所をゝゞ、十二月晦日より夜四更ゐ祝夜冠帯劔して、海ゐ入和布苅く帰る、終夜祝詞あり、元旦ゐ和布を神前ゐ奠し、既みてそれを撤し、国主ゐ献るをゝり、

み 兼三冬物翼

廣雅 翼ハ両雪雑り下るあり ○ふぞれみぞるゝ 深川集 附御簾ふこぞゝ下加茂の社家、をゝらくゝ

みそさゞ酒

叢酒ふ三の花 霜の異名あり 庸物筌 水の花の轉音とも又雪と六ッの花とのふ霜と三ッの花ともゐふ名也、

水漬

鳥中ゐ水と出ゞと勲と

水鳥

浮寝鳥 ○時珍曰水鳥ハ夜喙水禽と云、

寝鳥、水鳥とりふあり、

ハ味長くゝて尾促るハ浮寝鳥、水鳥とりふあり、 堀川百首 水とりの玉藻の床のうき枕ふゝさゐひいられうまさるる巨房 綱介

鷦鷯

桃蟲、巧雀、女匠、黄雀、巧女、巧婦、水鳥ハ昼もゝ〳〵寝る物く、故ふ夜分ふあらぜ、桃雀、ホの諸名あり ○時珍曰枕ち黄雀ふ似て小し、灰色ゐて斑あり、声吹噓ゞ如し喙利雛のごゝ〳〵芽葦も出ゞと取て巣と為る大さ雞卵の如くゝてこれごと繋ぐふ麻髪と以てし至て精密をふゞ、樹上ふ掛或ハ一房二房故ふ荘子ふ云、林ふ巣くゝて一枝ふ過ぜ、 貞享式 古抄ふハ秋ゐゝて、渡り鳥の部ふ入さゞごゐ山雀日雀の類ふいわらぜ、仔鶯のごゝ物ふ連立ぜ、民家の軒ふ馴て馬防と傳ひ水棚ふあそび声の清ゐ殊更ふ寒ゝし、春帰る次ゐもごえねいゐ、

木兎

和漢三才面会 木兎日本紀用二此二字一

大さ兄鵐の如くして全体褐黒色、白彪の豆ふ似
そるものあり、臆胸赤同色、横ふ白彪あり、相乱て蛇腹
の文ふ似ふ、頭目猫の如く眼の外白圏と作ふ、眼中
黄赤あてよく旋転ふ、毛角小さき黙彪あり、夜声
梟ふ似ふ、世俗頭巾と鴟鴞ふ蒙らしめ、或ハ虻蚋の
皮と以て囮と作て、諸鳥ふ捕ふ、貞享式古抄ハ秋の部
ふ入れど、渡鳥ふもあらざれバ、色鳥ふとらざるまゝて鳴声
の物凄きハ寒さを厭へるゆゑや決して冬と定ひ、

水涸 続猿蓑 水

旬冬気ふつねふくもるゝ池の中ふ道ありてとらつる

十一月 深山草 花彙 茵芋 深山榕と訓ず

深山背陰の地ふ多く生ず、
其木高く上らず好で偃臥して藤蔓の如く
灰白葉莖上ふ叢生ず、冬を凌て凋まず形ち蓬累紫
の葉ふ類して長大あり、冬季勿論ふぐし、
穂となて簇生す、彩紅褐色の実と結ぶ、樟柳ふ似
て大し、○和漢三才画会ふ深山榕とらつるハ四月細き白
花をひらきぶ秋実とむすぶとらつるふ同名別種あらんこと

御髪上 紀事

此月吉日をえらび、御髪上行ふる、極臈ふ至ると奉る主
殿官人松明と献衛士ふとと勤む、往昔ハ多く年の日
を用ひらる、公事根元蔵人御ぐしのけづりふぐを給ひて、
ひてもくるり、

葭和田の鯉取 鹿文日此事古式ふ偶和及が

芋環ふそそう和漢三才画会鯉ハ、城州淀川最も良、
武州浅草川常州筑波和田ふ次本朝食鑑筑波和田
の鯉ハ流と湾らざれど清うして、江近うふ湖うふ通ず、
魚梢肥て脂もや多し、○里人寒中ふとと捕る鯉長
大あるハ三四尺間漁人ふて、
れと懐き捕る者ありとぞ、

三冬尽る 初冬仲冬季冬これと三冬

とりふ万葉三冬つき春ハられども梅の
花君ふ思ひ折人もをらず 大伴家持、

燔糟と食ふ 朔日 事文類聚 峡人十月朝日多く蒸黍と作りて節物とす、

荊楚の人多く燔糟と
食ふあるひハ糖ふまぜ、

十夜 五日より 無量寿経 此

十六日迄ふ於て善ふ修

もること十日十夜あるべし他方諸佛の國土ふ善をあつめ千歳ふ勝れり、云故ふ十夜とらふ〇洛東鈴声山真正極楽寺真如堂天台と以て始こまた本尊慈覚大師の作あり、此像灵驗ふよりて別時念佛を始む、これを十夜と云蓋伊勢守貞國もううき十七日〇洛陽恵日山東福寺開山忌もしめてこれと修也、聖一忌

紀事今日方丈ふ什物と飾り午後聖一の像を腰輿ふ乗て寺僧前後ふ随従ひ、経堂の須弥檀ふ安置も、此開山忌昨今と年中遊覧の終こと、故ふ毎當納とらふ聖一ハ弘安三年十月十七日寂も、偈ニ曰利生方便七十九年、欲知端的佛祖等傳云の真筆を開山堂ふ掲盈夜のうちまく陰晴と論ぜず、時々急雨あり、これと時雨とらふ、初時雨村時雨、洩の時雨、袖の時雨、川音の時雨、松風の時雨各頭字の部ふわろて注を〇

時雨 夕時雨 小夜時雨

液雨時珍曰立冬後十日と入液とらひ小雪ふ至て出液とらふ又薬雨とらふ、百虫こと飲ぐる故伏蟄し て来春ふ至る云〻和俗液雨とらぐと訓を、時節と取合せてらく、

兼三冬物

霜 艸

冬 菊の異名 藏王いく代へし

今朝の霜 朝霜 霜夜 霜日和 霜解

大戴礼霜ハ陰陽の気あり、陰気勝ときこと凝て霜とある、歌名ふ霜ハ寒あり、其気慘毒あて物皆喪ぶるあり〇青女さいふをあり、霜の三ツの花ホの異名あり各頭字の部ふ注ス、霜の花華談天圣中青州盛冬ふろ濃霜と屋尾ふおく、皆百花の状ちをあり、霜の劔

春秋感精符霜ハ殺伐之表ニ云寒鞭駈来難駐暁叉裁来錦不完中呂 遠近集落葉衣さもらふ霜の劔あり、実次〇霜と劔ふそいらふ又劔と霜ふさとてもらふあり、本朝文粋奉行丈女雄劔花腰挍則秋霜三尺源順をもらるある

霜柱 新撰六帖谷ふ〳〵岩屋ふそる霜むら〳〵たる一冬ごとふ

霜朋 同上山里の門田のあぜの霜らんん光俊、ぐずもち穂いろ〳〵道も絶

て衣宮 **霜とれ** 同上 くふはまこと山のあさまふもの
内大臣、 **霜とれ**をれて空うさそもり雨ふりぬら
光俊 ひさご集 酣勺薄くもり日ハぐんろうと霜をれて朝
○青藍云上ふおげくる哥の意をもて案ずるに霜と
ととい空うさとりてくまく霜の **霜の鐘** 山海經豊
ふらぬとのあめや、霜ハ晴天ふある物あれど
山ふ九鐘あり霜ふるときハ自ら鳴注云霜ふるときハ
金気應ずる〉 庵栗 盆山の釜霜ふ啼声寒し 当薫
遠近集 つねとも此鐘ひくく霜夜ふ響重安 **霜の声**
宋邦綏霜鐘詩 響沈朝月落声遠帯霜残
匝材集 紹己撰、 霜の壱、注寒時もくくと声ありくし **霜**
云く 句兄弟 酒くさき蒲團ぬきうう霜の声 其角
の鶴 八重垣 霜夜の雀ハ霜ふ苦をもむものしふて **霜**
霜夜の雀ととも霜の雀ととのふ、 **霜**
み 古式ふ載ぞ、桜ぞるふ霜柱ふ對くし、 **霜の袴**
一面ふおもきこころせる霜とのふもの
義未詳、作例とあげて後勘と俟のみ、 麦生集 のふり
霜といふ袴着とこん五ツ子の橋ふ霜保友 おくとのふハ

質物ふ霜のふる袴春遊 降霜の袴着とぞて六ツ
の花 保友 玉海集 日あくまくく破るも霜のあさ
たるま、 **霜やけ** 前漢趙充國傳 家潘の患注
重治、 三云寒ふ因て瘃て指の醜るし
云く○和俗いふ
霜やけあり、 **志ゐまね** 卿傘
おゐるとのふをいくく○ねそやきぬ
戸をそそるやちづり雪荷凡
そるとゐて凡の事ふあるあり、まきことわちぞれふ凡
のとへうると云く 堀川百首 波のよるやうづまとわ
る舟もやそぎりと **篠吹** 葉の条るべし、 **白炭**
せもまふ紀のぞそる、
雍州府志 河内國光の滝の上人樹の枝ふ伐る事五七
すぢうふ小枝と連ねこれと焼其色白灰色これと白炭
と称也、又細炭とくく黒き切炭の間ふ雑置て
炒中の飾とそ○白炭や 焼ぬむくの雪の枝忠知 **獣**
炭 晋の羊琇性豪侈て費用復斎限あく常ふ
眉炭と和し、獣炭と作り酒と温む洛下の豪

貴競ひてこれを做ふ【国老談】宋の太祖嘗て冬月獣炭を徹つ左右敬つて曰今日苦寒、上の曰天下の民寒き者衆し、朕何ぞ獨温渝あらんやろ**爐**火炉の小き者 **助炭** 冬春地炉を覆ふもの**手**こ数品あり、**生薑酒**【本朝食鑑】生薑酒凍瘃及び冷積と治を、**十一月** **襪**くの部献屢襪と**生薑堀**くる条ふ注も、【滑稽雑談】本草ホの説よらば秋月根と堀べきふや、京都ふハ多く冬月ふほるゆゑ注来ル季ず物ふ十一月とも、猶東國よハ秋分前後ふ堀之、**新干蕪、新干大根** 九干蕪ハ冬至以前ふ根と取て檐間ふ掛てこれと乾くそ、かるふ干蕪と名づく、春月者煮食ふ極て甘美、

十二月 **ちはを** 【俳諧歳時記】この月とのひて年極の略くつとをと連声ふいふそうふ後師之よつて種々の説とあも者ハとを

暗推あり、奥儀抄ふ云この月俗とむく仏名と行ひ或、経をよませ、東西ふ駈走せり故ふ、師走せ月とあやまれりと是字ふつきて説設くるの誤ご貝原篤信云豊後国ふ四極山あり、四波津山と称もその名も訓も證やくまたべ〳〵とこの説其要を得るふ似ようれども四ハ数の四ふあ〳〵ごてとこのとを畧せるまれバ四波津と書ハ可ご

真名ふハ年極 **神今食** 十日 六月十二月一年ふ両度とこく祭〳〵、あ人夏のふの部ふご、

正月事始 十三日【紀事】十三日ふ正月万支の経営始そて修之俗ふこれと正月の事始とこく心ふ、この部五条天神

鹽引 【虚栗】入相の鐘ふ

とこく二月用る所の物多く買之、**勝の餅** この祭の条ふ出ツ、

歳暮 冬ふあ人、**歯朶刈** 歯朶る命うあ、齟落刈とらひて冬季の部ふ出せり作例とひごし、**除歳、除夜**

【沈活筆談】以新易舊曰除、如新舊歳之交謂之歳除、

名 その部ふ倣せ出を

ひ

十月 氷魚を賜

公事根元 更衣の節会に、氷魚と賜ふ、

柊の花

五出細き白花をひらく 大和本草 拘骨 本草時珍説ひららぎ ふもと有之、

枇杷の花

夏のひの部 枇杷 の実の条ふ注も、

鵺

和漢三才 禽会 一名ささき 一名ぬえ 形猿の如し頭黒く白き虎あり、俗霜降とふ 頷頬正黒、雀の如し頭黒く白き虎あり、翅の上ふ白き羽黒き羽あつて脣ふくろう、觜脚蒼黒其声清亮ふして多く囀る、背翮灰赤ふく黒き虎あり、俗霜降とふ 頷頬正黒、又黄鶸あり、 貞享式 古抄ふい渡鳥の部ふ入れど其名もその声も朝霜の気色とらひ秋ふ小鳥の多く来る比ハ冬の部ふ跨ぎて此名も加減とふべきあり、 燕

三冬物 氷魚

名産ふして他州ふあ〻伊勢江戸の江ふある白魚より勝て潔白あるものあり江州田上及び宇治川ふ網代を打てこゝと取堅田ふそハ攪網とふて多く取れり、

氷魚の使

延喜式 山城国乙訓郡 氷魚網代一處 其氷魚九月より十月

ふいくるまで貢之云々 これと氷魚の使とふ、

氷面鏡

漆塩草 紐鏡と書氷のごとくの如くあるとふ、

火鉢、火桶

桐火桶 枕草紙 人の家ふ竹篦あるべきたる火桶云々 古制の図とふ内ハ木地或ハ箔ふたご其上ふ彩色の絵を書ふる物〻、 脾 字彙 脾と疹と同〻、葱あるべし、

干葉釣

菜ほの部ふ見ゆ、

十一月

日吉祭

中の申の日〇一年ふ両度あり、夏の部ふ見ゆべし、

野祭

上の申日 一年ふ両度あり、夏の部ふ見ゆべし、

平野祭

公事根元 建暦三年十一月十八日より始中申 そて殿上の使と立らる、過ぐる八月ふ延暦寺の衆徒長楽寺ふ官兵の為ふ多く誅せらるゝふ依ふそのころ御願ありふより

日吉臨時

日蔭の糸、日蔭の蔓　との部豊明の条ふ注を、日の使　との部節分の条ふ出ツ、

十月　孟冬旬　公事根元　大ごとの義ハ孟夏の旬ふおよび

紅葉散　貞享式　ふ古式をもどさく秋と

もさんどこい古式ふよるゑて、兼

三冬物　もち雪　青藍云ふち雪とのつる詞増山の井とそしの後ふ撰ぬる諸

抄ごなるもちと假字とそ書て故ふ名義明ろまらざるふより月令博物筌ふ雪の石又ハ木をぐへつりつろとそそたるあり雪とそもとの説おそりもち雪とくハ粉雪ふ米雪ふごいてつろ同じく餅ふそそのぐりもちまん草　寛文四年印本立圃撰　餅雪便船集　寛文九年印本梅盛撰　小米雪、粉雪、餅雪ふ男文字とそ書つる證とまべ〳〵　毛吹草　餅雪のうへきことまろ木の葉ふ　道二　犬子集　餅雪ふ齒ことつける木屐ふ

重頼　餅雪のふる空ふ出よ日の鼠　良徳

十二月　杜冬　十四日　一年小両

度あり夏のもの部ふべし、

十二月　孟宗竹　寒竹の子　大和本草　和品　寒竹冬筍と生ぜ又孟宗竹ともつく色黒ク細し、○晋の孟宗至孝あり、後母筍と好む宗をもとめ冬ふ月ふと求めもむ宗竹林ふ入て慟哭笋ふ為ふ生ぜ、以て母ふ供まることと得ふとつる古事ふよりて、孟宗竹とらふとご、○鳳尾竹と孟宗竹とをつふとつくつる、

餅粢　餅米洗　紀事　餅延　昔の尾備夫益夜とまく木槌と肩サ、街衢ふ巡り高声り餅搗と呼傖俗米並ふ餅と春と加都ろふ貧民これと雇ひ以て餅と春〳〵む、日間ハ暇ふきもの又乞人の餅と請者と嫌ひ多く夜ふ入て舂、

餅の札　吾山遺稿　江戸ふて非人ども門々ふ立て、餅巻の祝ひそ餅をもふこひ得る家ことそろう家ことの卯ふ門の柱ふ紙ふそ判ごて張ぬくまり、古云　篠葺　弱法師我門ゆく廿餅の札　其角

餅花　冬の正花　紀事

兒女小丸の餅と枯枝ふ貼てうれと號ぶことを餅花とふ

廿日 神社便覽 官者殿ハ京極四条ふ鎮座世擧てこの神ハ誓文起請祓兒の社とふ 紀事 俗傳ふ此神ハ偽盟の罰と兒とせ一むとふ故ふ商賈此社ふ詣て娶き賣の罰と祓ふ故ふ十月廿日講参詣ることを誓文祓とふ此社何神ぁるや詳ぁ〳〵ず世ふ土佐坊正俊と云ハ後義経の前ふて偽り追討使ふ因ふく罰果ふ殺され一故ふ他人の偽誓の罰と救ふとふ、

兼三冬物 列卒纏 十二月 節分

狩の条ふ注ス

この部ハ冬の異名ことふの部ふべし、

福ハ内 紀事 元節分ハ立春の前日よあり、年内節分一豆打 終ることを鰯さい鬼ふ頭さを

年越 あることきハ、炭裡熱豆と殿中ふ撒せらるゝく疫鬼を逐ふ、春ふあるも亦然り、今夜大豆と撒を拍といふ、同夜家々の門戸ふ鰯の頭首を ふ狗骨の條ご挿

む、傳へいふこの二物疫鬼の畏ろ〳〵所あり、一家の内ふ事を執る者を年男ととふ、高声ふ鬼ハ外福ハ内ふ時て、疫ご禳ひ福をとりとむ、下略 ○おろ〳〵の頭さを、 土佐日記 九重の門の注連縄おろ〳〵の頭ひらぎさを もんど、いのふとぞひあふる云〳〵 日本書紀 云口女即編 魚云〳〵卜部の説ふ鰡ありとふく道遥軒ハ名吉伊勢鯉とふ魚ふ云く〇いもこさを、 埃嚢抄 聞鼻ふ云ハ鬼ふ人を食へむ鰯を炙串とふづけて、家々の門小さとべ〳〵然るときハ鬼人ととるべ〳〵ことを、毘沙門の御示現云〳〵 夫木 世の中ハうそぶかねども ひらぎこの色ふ出ても ふぐとぞおもふ 為家 ○むかしふ鰯みゝ〳〵物おらんふ節よしの頭さとてうこを、後ふ鰯みゝ〳〵物おらんふ

季候

紀事 節季候、今日廿二日より乞人笠の上ふ歯朶の葉と摺ミ赤き布を以て面ご覆ひ、ひようづふ両眼と出し、二人或ハ四人相ともふ人家ふ入り、庭上ふ躍と催し、米銭をとる、よふ昼と節季ふとふく、節季を告る歳暮の詞あり、二十七八日ふ至て止れり、〇今江戸ふて節季ハとふ者の姿ハ編笠を以て面ご覆

ひ宝尽くなど更きくる、紙の前垂とうけ、破りくる竹と両手ふ持てそとをとゝき囃しあるら祝詞と唱く門口ふ躍るむ、節季 俗臘月と 節料米 日本歳時記十二月上旬或ハ中旬臘月の節ニ入て多く米を舂聚べて以て正月の用とそなへ、○曠野集附句米舂やとい志まもあり 其角、歳暮祝ふ 凡十記曳蜀の風俗ゟ歳晩相与ふ餽るそれを餽歳ともふ云云かの國ニ

す

十月 水官解厄

この國をもふおもふ、けの部下元 潜確類書ニ十葉と月の水仙の条ふ出、水仙花 ともそもろ戦葉の者ハ ちろぢ云云草葉の者 と金盞銀臺と名く、 兼三冬、物 杉焼 杉の魚肉ふゞへ移 さんがらめ、杉板の上あて焼もり、箱そて焼もありそ、炭 小野炭良炭輪炭、廻り炭獣炭、賣炭翁、各頭字の部ふもろもろて注ス、炭斗 茶経烏府是炭斗もり、茶當飯ふの

異るあり、好む ととろふまつふ、山炭頭 王海集擬貞室香ととめめや炭ふしら宗方○青藍云伊豫の産某云、我国ふそハ炭のまゝ焼尽くさを煙ると炭がしらとゝ云ゝ宗方の句些意ふ合ニ年浪草ふ一俵の内ふそ大ある炭そゝふ とつるハ理り聞ゑされとさてハ風情うそゝ、炭竈 炭ふ焼く竈とり、御今 山類ふり 猿 炭竈ふ手負の猪のあらをすゝり人倫、炭賣 冬の旦炭賣のおのゞ妻そそ黒うあ重ね、すゝはき 妻ふ注ス、雀鷁 つゝこゝ物語 此事陽成院の御時ふ始る、○或説ふ煤掃ふ十三日と用ふると此日悪宿ふあゝり吉日ふれバ煤ふ拂ふと、

中村俊定文庫